

The Kansai University Bulletin

Osaka, September 15th, 1926 - No. 42

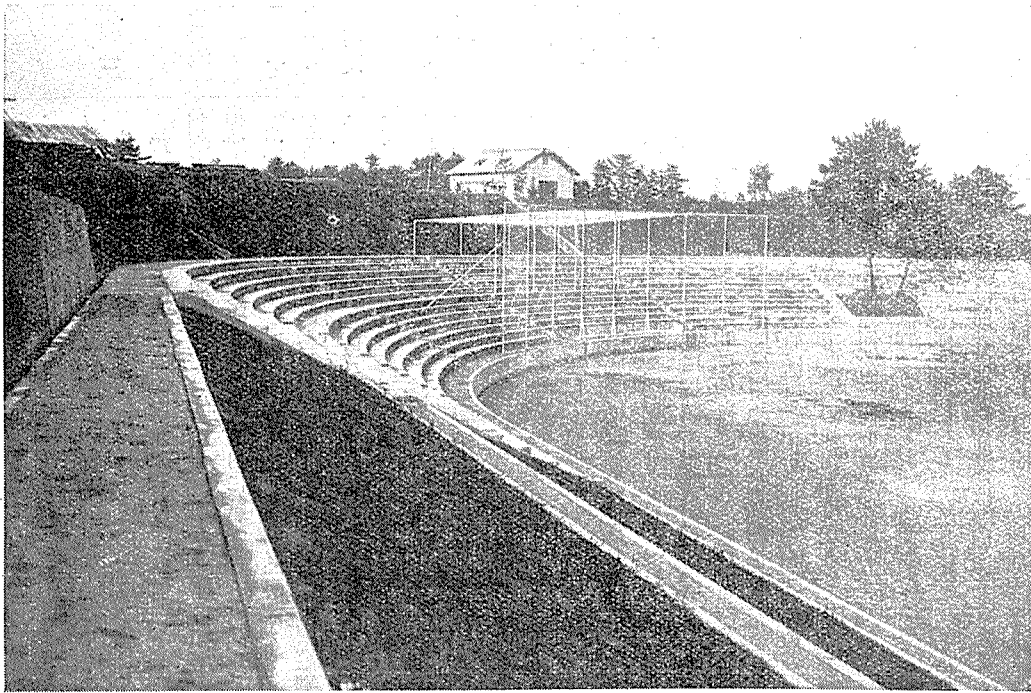
報學山里子

行發日五十月九

號二十四第

年五十正大

The University Stadium just completed, covering 10,000 *Tsubo* in area



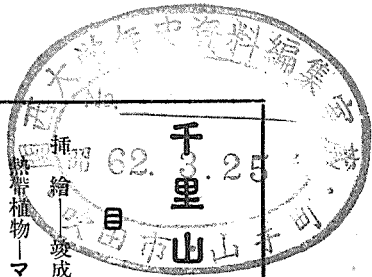
(照參事記號本び及號六十三第) 場動運學本るせ成竣

阪 大

堀 佐 土 話 電
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振
番五七八二一阪大



次

挿繪—變成せる本學運動場—痛快に繁茂する
植栽植物—マラッカの波止場—校友會愛媛支部

發會式記念撮影—オックスフォード大學のエン
セニア祭—福島文藝部夏期地方講演記念撮影—
皇陵崇敬會御所拜觀記念撮影—キヤナン教授の
近照—近く渡歐の途につく校友内藤越夫氏
哲學概念の歴史的發表

關西大學教授 武内 省三
在 ロンドン 戸田 省三
留學途上隨筆
エツデウェアース教授の略傳及び學說
ジョン・メーナード・ケーンズ

學内報—臨時協議員會開催—第二期授業開始
—専門部補缺入學許可—本學大運動場竣成—學
生控所新築—千里山學報創刊四周年記念茶話會
—歐米諸大學と學報の交換—第四回夏期語學講
習會修了式—第三回夏期自由講座—宮島教授英
國王立經濟學會終身會員に選ばれる—宮島教授の
學外講演—戸田留學生通信先—人文地理學講演
會—附屬第二商業學校彙報—附屬關西甲種商業
學校第二期授業開始

校友彙報
學生彙報
歐米の學界
千里山歌壇
新刊紹介
雜 錄

哲學概念の歴史的發展

(特に現代の哲學概念の地位及意義を明にする事を主たる目的とする一篇)

關西大學教授 武内 省三

一 一八六五年リーブマンが「カント及其亞流」
「Kant und die Epigonen」を著して「Also muss auf Kant zurückgegangen werden」と
ふ標語を掲げて以來哲學は十九世紀の形而上
學的傾向より再びカントの批判哲學的傾向へ
と移つて來た。爰に功績多き新カント學派が
榮えるに至つた事は熟知の事實である。固よ
りカントの哲學の内には未だ後繼者に依て徹
底を深められ或は體系中より除き去らる可き
不純なる夾雜物もない譯ではない。之等の個
個の點を修正し強調し或は深める所に新カ
ント學派の努力の標的があり、又新カント學派
なる一般的稱呼の内に包含せらるる數多くの
學派が區別せらるる契機が存するのである。
其等多くの學派の内にて最も多數の後繼者
を有する物はコーヘン、ナトルプ、カッシー
ラを頭目と戴くマーブルグ學派であり、之に
次ぐ物はヴェンデルバンド、リッケルトを代
辯者とする獨逸西南學派である。
之等の學派は其主たる興味を哲學體系及
カントの解釋した問題或は解釋せずに残した
問題の個個に關して異つた意見を抱いてお
るが共に新カント學派なる一般的稱呼の元
に包括せらる、共通點を有する。即共にカ
ントを襲いて批判主義的立場に立つておる事
である。私は此の新カント學派の哲學概念を以て

現代に於ける代表的なる物と解し——フッサ
ール等の稱導する現象學を除く——之を世界
歴史的立場に立つて如何なる契機の元に哲學
は現代に至つて批判主義的傾向を帯びねば
ならなかつたかを理論的に、又時代史的に考
察して見たいと思ふ。

二

現代に於ては哲學は規範意識としての價値
判斷を討究する學と定義せられる。然して論
理學、倫理學、美學を其領域の内に數へる。
即規範或は當爲としての眞、善、美等の價値
を研究するを以て其本來の目的とする物であ
る。然して此等上掲の三部門の統轄的な部門
として獨逸西南學派に於ては「聖なる價値を
取扱ふ宗教哲學を、又マーブルグ學派にあつ
ては文化意識の源泉としての心理學を第四部
門として數へる。然して爰に注意すべき事は
在來哲學中の哲學も考へられ來つた形而上
學を哲學の範圍より除外して了つた事である
哲學は現代に於ては徹底的に規範、當爲の學
となり「實在」の研究は全然驅逐せられ終つた
のである。此事實は實に批判哲學の精神を繼
承した物として理論的見地に立つて又社會的
見地に立つの如何を問はず極めて深き意義を
有する點である。然らば哲學がかく究極的實
在の學たる事を罷めて價値の學たる可からざ
りし理論的根據は如何なる物であらうか。

抑も總ての命題は判斷 Urteil と價値判斷
Beurteilung の二種に別たれる。「此花は赤
い」と言ふ判斷は前者に屬し「此花は美しい」
と言ふ判斷は後者に屬する。此兩種の判斷は
文法的形式より見るときは同一であるが其論
理的性質に於て見るときは全然別種な物であ
る。即前者にあつては二個の表象内容の單

結合關係が言ひ現はされておるのみである
に反し後者にあつては表象されたる對象との
對する評價主體との間に存する關係が述べ
られておるからである。然しながら我が今
一層思索を深めて考ふるに價値判斷と全然無
關係にして獨立な換言すれば價値判斷を伴は
ざる判斷其物は果して可能であるかは疑はし
い。何となれば我が或判斷を立言する利那
既に該判斷の妥當なる事即眞理價値を是認し
ておるからである。即判斷の中に言ひ合はさ
れたる内容に對して判斷主體が「眞なり」この
價値判斷を下しておるからである、かく見來
るべきもし價値判斷の伴はざる立言ありとす
れば其は單なる表象結合にすぎずして立言者
は之に對して其眞理なるや否やの決定を保留
しておる種の判斷、即疑問、或は問題的判斷
problemsches Urteil にすぎない。従て或
命題が單なる疑問或は問題的なる表象結合の
域より進んで立言する判斷の域に達した時其
は必然的に其内に價値判斷を含む物と見られ
なければならぬ。
斯る價値判斷は獨り認識の領域即眞理價値
に於てのみならず意志、即倫理價値及感情即
美的價値の領域に於ても亦存する事は明か
である。然かも此等の價値判斷の機能は實に斯
る價値判斷の是認作用を俟て初めて特定の認
識、行爲及觀照が眞となり善となり又美とな
る事が出来る點に存する。換言すれば眞、善、
美が成立するに至る根據は實に之の價値判斷
であると言ひ得るのである。我が眞理とは
表象と其對象との一致であると言ふ主張する
の人人に接する。然しながら此の人人の主張
する命題即對象が表象に一致すると言ふ命題
も彼等が價値判斷によつて是認を強要せらる

べきにのみ正しい命題であるとして主張するに至るのである。又懷疑論者が世には真理なしと主張する時彼等が斯く判断する事が真理であると言ふ價值判断の是認が論理上前提される。判断内容の相違は兎に角として一の認識が認識として主張せらるる根拠は價值判断である事が略明にせられたと思ふ。之と同様に我々の意識的行爲が機械としてではなく「行爲」して成立する爲めには同じく價值判断の是認を得る事を必要とする。美の場合亦之と同様である斯る價值判断を前提せずして一の立言は單なる表象結合たるに留まり一の完全なる命題を構成しない。又斯る價值判断を前提する事なくして一の行爲は人格の發現としての意義を缺く。

如斯認識、行爲、及美的觀照の意義が眞に價值判断に依つて初めて成立する物であるならば其成立の根拠たる價值判断を以て哲學の對象とするのは極めて當然の事であらねばならない。爰に現代の哲學が價值の學であると思ふが哲學の領域から驅逐せらるる言ふのも亦實に此點に其理由が見出される。古來形而上學は究極的實在の學として哲學の對象であり來つたが之は認識を實在から導き出さむとする獨斷論の立場に立つ限り許されたのであつた。然しながらカント以後逆に反つて實在こそは認識によつて初めて定立された物である事が明にせられて來た。換言すれば實在に關する判断はかく判断する事を是認する價值判断に基いて初めて成立するてふ經緯が判明になつたのである。然らば形而上學は今や個別科學と同様に價值判断の上に築き上げられた建物として土臺石其物から區別せられ學的探

究に於ける第二次的地位に立つ事になる。哲學は最究極的原理の探究として價值判断の研究にのみ其範圍を局限し形而上學を其領域から追出した事は理論上當然の事と考へられるのである。於て哲學の領域は論理學、倫理學及美學等の價值學を包括する事になつた。然らば哲學は價值を討究するに於て如何なる方法を用ひるか。

抑も價值をば心理發生的見地に立つて討究する時は古の經驗論の轍を踏んで許し難き矛盾に陥る何となれば第一に價值を経験心理學の立場に立つて討究する事は認識の成果に依存する事である。然し元來價值を討究する本來的目的は一切の認識成果の成立する根拠を求むるにあるのであつて此點に於て心理學や生物學も亦他の一切の科學と同様に其成立の根拠をば價值研究に依つて呈供せらる可き物である。自ら根拠を價值研究に與ふるは本末顛倒と言はねばならぬ。第二の非難は心理發生的見地より價值判断を考察する時其は自然現象として因果の制約關係に於て認識せらるる結果一切の價值判断は個人的或は社會的原因に制約せられた必然的結果たるに於て一切は平等である。其所には必然の發生はあるが價值的差別はない。従て此立場にあつては特定の眞理價值、善價值、美的價值が如何なる原因の元に如何なる經緯を経て成立するに至るかのザインの問題は明にせらるるが如何なる價值が其其の領域に於て絶對的な妥當性を主張し得るか否かのゾレンの問題には些も觸れる所がない。存在の問題を解く科學は成立するが當爲を明にする哲學は此立場に於ては不可能である。

哲學はかく認識、行爲、觀照成立の最終根

據を尋ぬる學として價值判断を對象としつつ心理發生的方法を探る事が許されない。爰に哲學は價值判断をば其妥當の見地に於て論究しなければならぬ事になる。即價值判断は如何にして發生するかを問ふ事なく如何なる判断を是認する價值判断が正しいか、或は妥當するかを問ふ物でなければならぬ。爰に哲學の對象としての價值判断は存在意識として考察せらる可きではなく規範意識として、考察せられなければならない。と言ふ結論が出て來るのである。かくて哲學は方法より見れば規範意識の學となる。

現代の哲學概念に關聯して論すべき問題は數多いが最も著しい特徴として一對象を價值に求める事、二方法は妥當性の見地より討究せむとする論理的方法である事、三實在の學たる形而上學を哲學の領域より驅逐し去つた事を數へて一先づ行論を打切る事にする。

三

然らば在來哲學と言ふ概念の元に於ては現代に於けると同様の物が意味せられておつたであらうかを考ふるに決して然うではない。或時代には哲學は一般的な人生觀、通俗的な修養訓が意味せられておつた。又或時代には形而上學が、又他の時代には現代に於て見らるが如き價值、規範の學が意味されたのである。哲學の對象はかく時代の變遷を追ふて變轉した。又其方法に就て見るも亦一定した物はない。歴史は皆て哲學の對象ならざりし物なかりし事實を雄辯に示す。哲學史の内に編まれたる諸語の哲學體系は唯哲學てふ同一稱呼を以て呼ばれておる言ふ因縁を共有する文で其對象を異にし其方法を異にする點に於て全然相互に別個の物の如き感がある。ウ

インデルバルドが哲學史には Part I と言ふ同名異人の歴史の如き物であると言ふた言葉には深く味ふ可き物がある。

然しながら哲學は元來人類の嚮ふ可き歸趨を指す鍵を考へられ其役目を果し來つた。人類が其生存を最も意義深き相に於て充實せむに欲するべき先づ其の光を哲學に仰いだ事は獨り史實に徴する迄もなく我我自身の體驗に顧みて首肯し得らるる、故に哲學の概念即哲學は何を對象とし如何なる方法を探るかと言ふ問題は或時代或は或個人が何を人生の最終本問題と考へたかと言ふ事から自ら來る結果であつて同時にかゝる時代或は個人の生活上の理想の源泉をなす物である。此哲學と人類理想との關係は二重の形式に於て相交渉し合ふ。即哲學が一方生活理想を引き出し他方に於ては生活理想が不知不識の内に哲學を決定するのである。然し其何れにもせよ哲學の概念と生活理想との間には不即不離の關係の存する事は疑へぬ事實である。フヒテの言葉

を假りて言へば「一時代、一個人の哲學概念が何であるかは如何なる生活理想を彼等が有するか」を推量せしむる物である。哲學概念がかく時代によつて異なる言ふ事は時代が人生全體に對して如何なる態度をこるかて根本的問題の相違から來る必然的歸結であらう。

概して言へば哲學を以て一般的人生觀或は處世訓と見做す人達は宇宙の深秘を理論的に説明すると言ふ理論的興味よりは安心立命と言ふが如き道德的或は宗教的要求を滿たさむとする態度の人人である。次に哲學をば形而上學と同一視むる立場は宇宙人生の現實を有りの儘に其深奥の相に迄深入しやうとす

る點に於て前者は異なり理論的態度を採つておるが眼を現實の上のみに向け理想を現實より導き出さうとする現實主義的色彩が濃厚である。反之現實の價值を鋭く區別し哲學は唯價值のみを討究して現實を其領域より驅逐し現實が如何あらうかには全然無頓着に只專價值或は規範としての眞善美を討究する價值哲學は價值を當爲として實現す可き課題、或は現實が範る可き理想として説く點に於て著しく理想主義的である。

以上極めて概括的に三傾向を特徴づけた上で續て現代の哲學を見るに其は理想主義的傾向を探ておる事に容易く氣付くであらう。然らば如何なる理由に依て斯く理想主義的傾向が哲學に要求せらるるに至つたのであらうか。理論的に見て如何なる契機に迫られて理想主義的たる可く色づけられたか。又斯る經緯には之を一味相應する社會事象或は時代的氣運がなかつたであらうか、哲學は一見生きた現實の人間の血氣情熱に洩れ果てた特種の人間の思念する抽象空疎砂を噛むが如き長談義であつて活潑なる社會の事象とは無關係の埒外に立つ物の如くに見ゆる。然しながら其は恐る可き錯覺であつて豊富なる生命體驗が其表現を一般的にし嚴密にする爲めに止むなく難解なる術語を驅使す可く忍ばなければならなかつた結果である。かかる誤解は化學者の使用する記號や化學式が日用語でないの理由で化學其物を空疎な學であるに難するの愚にも均しい。數多くの哲學體系の根底には依然として哲學者の生きた體驗になつておるの如き時代的煩悶に織り込まれて呼吸しておるのである。我我は哲學を時代史的に見るに其世捨人らしい風手にも係らず意外に

深い愛着の絆を時代社會につないでおるに幾度驚かされる事であらう。私は哲學社會事象との間に密接なる關係の存する事を記憶しつつ哲學の概念が實に幾多の變遷を経て現代の其に迄辿り來つた経緯を一方理論的に尋ねるに共他方其對象及方法が社會事象の理想如何に密接な交渉に立つたかを概観して見たいと思ふ。

四

一、ギリシヤ哲學時代(哲學の發生)

先づ哲學の概念をば其語源に遡つて尋ねるに元來 philosophy なる語は希臘語の philosophia から由來した語である。philosophia は philia と Sophia の二つの語から成る philia は愛の義 Sophia は智の義である。故に philosophy は本來愛智、をも譯す可きであらう。即此語源が直截に示す様に哲學は智識の爲めの智識を求むる活動であつて智識の實際的効果如何を問はない。「知る事を以て」實際生活を営む上の道具の一と見做すてふ態度から一步を進め其齎らす實効に些の關心をも拂はず智識自體に對する純眞なる興味から思索し討究する事を以て哲學の本領と見做した。かかる理論的態度は固より兵馬控惚の際には生れ得可くもない。人心漸く社會的平和に忤れて物質生活の豊さの内に餘裕を見出し得るに及んで初めて現はれ得る。然して希臘哲學に於てはギリシヤ本土の政治的紛亂の埒外に立つて早くから隣邦諸民族と通商貿易に依て生活を享樂し得た殖民地に發生したのは又故なきを得ないと思ふ。我我は其始祖が「水」の哲學者タレスであるに聞いておる。發生の初期に於ける哲學の概念は其智識に對する態度が理論的であると言ふ點に於て前

代の實際的なるに比し劃世的な重要さを持つておる。然し其内容に於て見るに未だ漠然混沌として定形を有してはおらない。即宇宙の全智識を包括した極めて廣汎なる領域を内容とした一の總合的學であつて決して特殊科學に相對する意味に於ける哲學ではなかつたのである。然して爰に注意す可き點は此時代の哲學が主として自然現象の研究に従事し文化現象を等閑視した事である。此は當時の殖民地の生活が政治的或は社會的交渉から起る種々な煩さに未だ苦しめらるる事なかりし一面を反映する物と見られ得る。

然るに時代を追ふて複雑化した文化の發達は新しい智識對象を増加せしめた。即文化現象の研究である。在來ギリシヤ本土は紀元前七八百年の頃より餘りに多くの政治的無秩序を経験し來つた結果、野心を抱く政治家輩は事毎に民衆に媚び或は之を煽動して民衆の力を藉りて初めて彼等が野望を遂ぐる事に成功して來た。故に政治家の能事は先づ第一に雄辯を以て民衆を籠絡する事にあつた。巧なる外交術と智識とを以て善改を布く事は第二次的な仕事と考へられたのである。かくて一面希臘文明に極めて重要な意義を有する叢智、及詭辯術なる物も斯る政治的無政府状態に其發達を刺戟せられた點が不尠あると思はれる。然しながら他方民衆の側より見るに民衆の努力なる物が如何に政治上有力なる物であるかをば實地に、或は政權の移動、王朝の没落により、或は煽動的政治家等の阿諛的言辭により自覺し來つた結果民衆は一日も早く彼等自身の力によつて自由なる生活を築き上げやふと專制政治の弊害を野心政治家の跋扈に基く無政府状態の混亂から逃れ去らむ事を

熱望するに至つた。而して此熱望の實現を約束する物をば彼等は憲法の制定と完全なる政治組織の確立にありし信じたのである。主智的なりしギリシヤ人は透徹せる理智に依て理想的國家の建設を夢みた。彼等の希望は爰に學術的研究の姿を以て現はれて來たのである。之れ紀元前三百年の前後より亞典府に於て文化的研究の盛に勃興した所以であつた。我我はソフィスト、ソクラテス、プラトーン、アリストテレス等に此る時代の代表者を見るのであつて特にプラトーンの「理想國」アリストテレスの「政治學」「倫理學」等の著述が如何に斯る文化研究の隆盛を語るかの證とする事が出来る。

智識の對象は今や自然現象の外に文化現象も加はり範圍の擴大と同時に内容も亦深まつて來た結果爰に初めて學の分化が行はれ獨立せる個々の特殊科學が分立する事となる。希臘の學術を大成したアリストテレスは於爰、哲學なる語をば一般に學のシノニウム、否現代に於ける科學の意味に用ひ、哲學を分類して理論的、及實際的の二つとし前者には數學物理學、神學等を數へ又後者は倫理學、政治學等を包括せしめた。然して此等の哲學即特殊科學に相對して第一哲學 Prima Philosophia を立て一切の特殊科學の根底に横はる最普遍的にして究極的なる統一原理を探求するの任務を之に課した。第一哲學即眞の意味の哲學はかくして特殊科學の背後に座し之に君臨する學、即形而上學を意味する事になつたのである。

二、希臘哲學時代(哲學の倫理化)

然るに希臘の諸都市が政治上の腐敗、相互の嫉視反目、及外敵の侵入等諸種の原因相錯

終して終に其政治的獨立を失ふに至るや哲學は今迄の如き「智識の爲の智識」云ふ理論的態度を棄て今や通俗人生觀、處生訓、修養術を化し動搖不安、恒なき現世に於て幸福を求め得る唯一の手段を考へらるるに至つたのである。其原因は社會的動搖、生命財産の不安定の内に生存する人人に於ては智識の爲の智識を求むるの餘裕なく彼等に迫る切迫せる生存上の要求、逆境は如何にして彼等が之等の苦難に處してよく安心立命の境を見出さむかの問題に齷齪せしめざるを得なかつたからである。之にも増してより重要な原因は彼等が智識自體に對して新に感じ初めた失望、或は絶望であつた。振り返て彼等の祖先が何に努力し何を誇りたるかを思ひ見よ。其は實に智識其物ではなかつたか。然らばかくも望をかけた智識は如何なる果實を結んで希臘人の希望を豊に満たして呉れたであらふか。かく回顧しつゝ、現實を諦観すれば唯其所には悲痛なる現實の苦惱のみが横はる。「智識は何物をも與へなかつた」云彼等が嘆息するのが何で不思議な事があらふ。彼等が假りに智識に對する信頼の念をよしや幾分未だ持ち合はせておつたとしても果して彼等は欣で智識を追求するの熱心さ張合を抱く事が出来るであらふか。彼等が自然の深秘を究明し之を實生活上に應用しやふもしては經濟狀態の窮迫は之を許さない。又プラト、アリストテレスに就て理想社會の姿を觀じ之を微細に描き出す事を得たとしても僅て政治的獨立なき彼等が何時、如何にしてかかる社會を實現し得るであらふか。智識は彼等に於ては所詮過去に於て然りし如く今又何の幸福をも約束する力のないものであつた。斯る深酷

なる智識への絶望は時代を驅て實際的倫理的な要求満足に向はしめる。一語を以て悉せば安心立命の慾求が理論的慾求を克服したのが此時代であつた。哲學が修養訓となつたのは墮落であつたらふが無理もなかつた。

然し國力衰微し政治的獨立を失つた彼等が今や求むる安心立命が地上の富の抱擁を自己の諸能力の圓滿、完全にして且自由なる發展に求むるにあらざる事は明である。何となれば之等の物は望みて得られざるが故である。否之等を望みて得られざればこそ彼等は煩悶した。煩悶すればこそ此煩悶より逃れて安心の境地に慮慮するのである。所詮安心は物質への詮めより外求め得可くもない。かくてエピクロス學派は物質的慾求をよく抑制し得る人間を以て賢人とし我が安らかなる生涯を送らむには物質の縛に囚はるるなれど教ふる。我に水ミパンミだにあらば幸福に於て天帝に譲らずさへ斷言する。又ストア學派にあつては道德を修むる事に安心の境地を見出す。然かも善なる行爲は善其自身の爲めに行はる可きであつて決して其以外の他の不純なる觀念の挿はさるるを許さない。世に善言はるる物は善の爲めに善を行ふ可く理性の命令に従へる行爲のみであるを教ふる。此代表的なる二倫理學派は主張する言葉を異にするも共に物質に對して括淡たる可く強制する人人の言葉である點に於て相違はない。ストアの教ゆる善自體の爲めに善をなす可く酬を豫期するなかれて倫理觀は最も氣高き訓の一たる事を私は承認するに吝なる者ではないが少くも道德を強要せられて而かも酬えらるる事なき人人が最後の詮めとして捨り出す倫理觀である皮肉つて大過なしさへ思

はれるのである。
三、宗教時代(哲學の宗教化)

ギリシヤの末期に於ては德行を修むる事に依て安心立命の境地を拓き得可しと信じた事は前に述べた通りである。然しながら人類は果して道德に於て窮極の安心を得る物であらふかを見るに歴史の進展は明に其反對を語る。即各人が物質的享樂から眼をそむけ唯自が魂に立て籠り反省し、妄念を去り執着を却けるに専念するに及んで希臘人が夢想だにする事なかりし大なる心靈上の矛盾に當面したのである。由來調和を愛した希臘人は精神と肉體とは又相調和する物否調和す可き管の物と考へ來つた。美しき精神は唯美しき肉體にのみ宿る事に些の疑をも挾まなかつたのである。然るに内に内心を深く反省洞察し現世の快樂より安心の彼岸に飛躍せむと心構ふるさき其氣高き理想の實現を阻む意外に力強き暗黒の力が人間精神の奥深く潜んで意地悪き妨害を續けておるのを發見して愕かざるを得なかつた。暗黒の力は即絶ち難き肉體的慾求の謂である。然かも此時代の人人は物質を超越せずしては安心は得られない。然し物質への憧憬肉的要求は左程容易く征服し得可き物ではない。神佛に専念する修道僧すらよく肉的要求より解放せられむ事を欲するならば終身に亘る苛酷なる禁慾修行を我肉に加へねばならぬではないか。物質を超越せずして安心なく、物質を超越す可く肉は餘りに多くを要求する。噫肉亦何ぞ一切の苦み惡き迷いの源ではないか。肉は靈を助くるに非ず。靈の光を曇らす物であり靈の力を殺す物である。噫此肉故に彼等は安心の彼岸を望見しつゝも尙浮世の悲哀に浮沈せねばならぬ。かく彼等は

靈と肉との間に存する妥協し難き葛藤に氣付いたのであつた。然らば如何にして此の肉を征服す可きか、彼等の今迄の德行實踐の經驗は此の大敵を向ふに廻はして餘りに力脆き頼み甲斐なき味方であつた。彼等はより強き味方を切に欲した。其味方こそは神の力である希臘末期の倫理的傾向は今や再轉して著しく宗教的色彩を日に濃くして行つた。時恰も羅馬帝國は永年に亘る戰爭の結果國力は疲弊し奴隸や貧民は巷に滿ちた。然かも戰勝の餘氣を驅つて貴族等は奢侈逸樂に耽溺し此世の限の享樂を擲にする。世は今や斷頭臺下の舞踏を思はせる光景を呈した。豫言者たらさずも誰か來る可き大變轉を豫感しない者があらふか。斯る世の風潮に乗じて人心を囚へた新運動はキリスト教である。キリスト教は其精神に於てプラトの哲學を一味相通する點少しせぬ。希臘哲學がプラトの哲學を奉じて新しきキリスト教と相締結して煩悶を解決せむとしたのは無理からぬ次第である。爰に新プラトン學派の掉尾の活動が起つた。かくて哲學は今や半宗教の形式をこるに至つたのである。

他方キリスト教に於て見るに其當初は飽迄も「貧しき者、弱き者への福音であつた。彼等信者にあつては神は思索による抽象的な神ではなく實に活きた神であつた。然して彼等はイエスを通じて此活きたる神の人格に日々接するの思をなしておつたのである。斯の如き純粹に體驗されたる宗教たりしキリスト教も時代を経るに従て如何しても教義化し哲學と握手せざるを得なくなつて來た。其主たる原因の一は初代信徒が體驗し回心しに依て神と融合するに反し時代を経るに従て信仰は

エンセニア祭について

唯傳承にのみ得らるるが故に活ける感情の宗教は慣習の宗教、即形式と法則と教義の宗教に變つて行かざるを得ない事である。其の二は使徒の教が諸種の異教の内に立雜つて良く他からの批難に堪え自家の主張の正當さを證明する必要に而した事及びキリスト教が有識者階級に信者を得其理解同情を得るには合理的な理論或は根據が示されねばならぬ必要に而した事等である。特に靈智主義者の争闘はキリスト教の教義化を促進する最も有力なる直接の原因であつた。キリスト教は然らば如何にして此目的を達せむとしたか。即希臘哲學との融合である。希臘哲學とキリスト教とは各自異なる動機の元に自らの足らざる點を他に依て補はむと試みつつ左右より歩み寄り終に融合した。此に哲學は宗教と化したのである。然し中世期に入り文化は次第に衰ふるに及んで信仰と服従とは智識と自由とに代て勢力を得た。宗教は終に哲學に勝つた。哲學は宗教の前に跪いて其頤使に甘んずる奴隸の境涯に沈んだのである。かくて中世期は智識的思索に代ふるに信仰を以てした。信仰の榮ゆるる所には懷疑は姿を消す。懷疑思索に遠ざかつた中世の人人には唯信仰の光から眞向に照らされた道のみが唯一の歩む可き道と考へられた。柔順に教義を遵奉する事華華しく其與へられた教條の爲めに働く事、一言にして悉せば「實行」が彼等の生活の全内容となす。教會の繁榮と華やかな騎士の冒險物語とはかかる思想的根據に根ざしておつたのである。

(未完)

エンセニア (ENCHENIA) とはオックスフォード大學に於いて毎年六月に行はれる記念祭のこゝであつて、同大學創立者並に功勞者の靈を祀り盛んなる追悼の式を營むと共に、此機會に、詩文の朗讀及び名譽學位授與等の式典が行はれるのである。即ち同大學に於いては最も有意義且つ盛大な年中行事の一であつて、ケンブリッジ大學及び米國諸大學の卒業式に該當するものである。

本年のエンセニア祭には、オックスフォード大學總長のケーヴ卿が司會者として、萬て古式に範り、同氏の叙任式に次いで、名譽學位を受くる多數の著名なる人人を薦擧するころがあつた。別項の寫眞はオール・ソトルス大學の廣い方庭の芝生に於ける當日の招待客で、圖書館に於けるエンセニア祭の饗宴が濟んだところである。圖の左端にはメイリー教會で、中央の彪大なドームはジョン・ラドクリフ (英國の有名なる醫者、一六五〇—一七一四) が建設したラドクリフ圖書館の大ホール (カメラ) で、右端には同圖書館の控壁が見えてゐる。

エンセニア祭を紹介するに當り、端なくも思ひ起すのは本年一月三十一日に、本學に於いても、本學功勞者追悼會が營まれ盛大な式典を擧げて創立以來の功勞者の英靈を祭り、遺族を招待し、且つ饗宴が催されたのである。右の記事は本誌三十六號に詳かにされてゐるが實に感慨の深いものがあつた。斯うした有意義な祭典は今後ますます盛んに營まれることを信ずる。(M.S.生)

留學途上隨筆

在ロンドン 戸田省三

一、熱帯植物を見て

シンガポールで長き延びた椰子樹や檳榔樹、房を實を垂れた芭蕉を見た時に何となく其等の繁つた木陰に寝ころんで香の高い果物を食べて好きな小説でも讀んで居たい氣持になりました。ピナの植物園で芝生の間に隔離された形に於ける之等の熱帯植物に接して其の高い梢を仰ぎ見、其の廣がつた枝葉を眺めた時無遠慮な延び廣がり方に一種の痛快な感じを覺えました。

コロンボからキャンデーまで七十五哩の自働車紀行にはやはり繁つた熱帯の樹木の中を通りました。ちやうど午前三時頃でありましたので熱帯らしい青い星が光つてウネウネと連なる森や巨人の如く聳え立つ木木を照し出して居ました。沈黙の續き勝ちな自働車の中で私はやはり熱帯植物の事を考へて居ました。

自然の興へた長さだけ梢を延ばし、自然の許す限り枝を張り葉を繁らせ、其の能力のかぎり實を附けて居る熱帯の植物の有様に、延びんとして延び能はざりし私の心が憧れるのでありませう。私は私が熱帯の植物を見て痛快に感じなつかしく感ずる所以をかく解釋しつつこれから私の前に開かれる生活に考へ及びました。金と時間とを興へられて、能力の限り勉強の出来る、延び得べくんば延び得らるる留學生の生活を思ひ浮べた時そぞろに嬉しさのこみ上げてくるのを感じました。

私は快く走る自働車の中で一人微笑して居ました。漸く夜が明けて道端の椰子の樹の影が長く道に倒れて居ました。

二、海水の美

門司を出帆して愈日本の陸地が見えなくなつた頃には、後にあれ程親しくなつた同船の人人とも未

だあまり親しくはありませんでした。従つて其頃には一人で海の水に眺め入る事もしげしばでありました。静かな時には海の水は暗藍色で表面にはギラギラと光澤があります。其の暗藍色を船に割つて白い泡を混ぜると淡い綠色になります。單なる緑の色ではありません。濃い所あり淡い所あり渦を巻く所あり美しい模様を描き出します。きれいな芝生の雪解けのやうであります。嘗て小早川秋聲と云ふ人の芝生の雪解けの繪を見た事がありました。六甲のゴルフ場の雪解けかと思ひましたが、あんなものでも繪になるかと思ふと同時に色の美しいのに入つた事がありました。海の泡と山の雪と隔りあるものながら私は此の繪の事を運想しました。白波一つ立たぬ静かな海では此の立てられた泡の消えて行く音が又秋の夜の澄にすだく虫の音の如く美しく聞えるのであります。

私は此の美しい水を見ながら自殺の事を考へました。同じく自殺をするならば、醜い骸を梁につるさんよりは、黒き血に床を汚さんよりは、白き骨を線路の砂に曝さんよりは此の緑の水に飛び入つて消え行く泡の音に一切の雑音を消して暗暗たる藍碧の水の中に身を没し去ること本懐なれと思ひました。玄海灘の暗の夜に船に切られた海の水が燐光を放つて船の舷と鋭角の一邊を爲しつつ艦の方へ進んで消えて行くのはちよつと凄しい景色でありました。

三、降雨

香港からシンガポールまでの海上は殊の外穏かでありました。波もなくウネリもなく平坦とした海面を船は快く走りました。其頃私は漱石の「門」を讀んで居ました。漱石の筆から引き起さるる淡淡とした落着いた感じと海の光景が引き起す穏やかな感じとは我を中心としてピッタリ合つて居るやうに思はれました。香港を出て間もない或る日大雨に出會ひました。深い藍色の海は全く灰色に變ります。空も同じく灰色であります。水天の境は

全く灰色に塗りつぶされて天上天下一面に霞んで居ります。一面の灰色を破るものは滑かな水の面を縮緬のやうにして降る大粒の雨と、絹物の皺の如く砂漠に作られた風の跡の如く遠くに浮ぶ数條の線あるのみでありませぬ光無きに非ず、水無きに非ず、天無きにあらねど天も水も水天の境も同じ灰色に塗りつぶした光景は私の頭に虚無と云ふ概念を浮ばせました。此の虚無の景色をKさんに見せたら喜ぶだらうと思ひました。

四、マラッカ

多くの旅行者により見物の價値なき所見物する物なき所として輕視されて居る馬來半島の一小都會マラッカも私に取つては見物し甲斐のあつた町であります。一條の奇しき煙に人生を極樂と化さんと欲し一度極樂と化し得るを知つては己が意志をも代價に與ふるを惜しむとせざる阿片吸引者の陶醉の樣を見たのは其の一であります。更に私の感慨深く感じたのは、セント・ポールズ寺院の廢墟を見た事であります。故國を離れてセンチメンタルなつて居た私には殊に感深く夫について詩を作つたのであります。詞藻に貧しき身の詩作などおこがましき業でありますから散文に直して書きませう。

マラッカの港の水は綠色であります。此の緑の海に沿つて赤い瓦の家の叢が並んで居ります。その町の端に小さい丘があつて菩提樹の森の中に此の廢墟が隠れるのであります。此の廢墟の中にフランス・ザウイエルの墓の跡があります。

Here lay the body of

St. Francis Xavier, S. J.

Apostle of the Far East.

before its translation to God.

A. D. 1553.

人も知る五百年の昔、胸に信仰の火の燃えけるザ

ウイエルは道なき國の人人にたえなる恵みを傳へんと雄雄しくはるかに此の瘴癘の地に來たのであつた。如何に眼を天上に馳せども足を地上より



痛疾に繁茂する熱帯植物(ペラニア植物園入口)

離す能はざる人の子の悲しさ。ザウイエルの希願高くして尙俗世間との交渉断ち雖も些些たる事のいさかひより或る夜彼は此の地に殺されたのであります。其の夜の月は青く冴えたてでありませう。暗色に残る廢墟の壁は彼の果し終へざりし意圖の象徴でありませう。其の壁の所所がほころびて赤土色なるは彼の懺みの現れでありませう。土を踏む者の如何に運命を天にまかせよは云へ、如何に毀譽褒貶を神にゆだねるは云へ、自ら求めず願はざる俗事の爲めに其の意圖を果さなかつたのは懺みても尙あまりある事でありませう。彼が神に對する信頼と意を果さざりし事の懺みとの心のもつれを語るかに、焉かすらは屋根もない壁に巻き懸つて居ります。さはあれ萬能の神を信じ自ら神の御心と信ずる所を行ひたればたごひ業半にして倒るるも神は彼が魂を其の右手に抱き給ふなるべし。夏草は蓬蓬と繁つて温くも墓石を埋めて居りました。

五、絶交—其の一

香港で乗船した船客の中に二人の若い支那婦人を連れた一人の西洋人がありました。男は五十歳位女は二十五歳と二十二歳でありました。年の上なる女は背高くたくましい女でピアノをよく引き若い方は鈴張り眼の丸顔と調和した鼻の上に嫌味ならぬ縁無し眼鏡を載せて、大きい眼で人を見無邪氣な女でありました。此の男と二人の婦人との關係を如何に決定すべきかについて、船中のつれづれに、皆思ひを凝らしたものであります。男は「私の娘です」とあまり上



(るみてれ殿に丘のこは墟廢の院寺ズルーボトンセ)場止波のカツラマ

ばならないが二人の容貌に態度に姉妹らしい點は少しもないのであります。娘である云ふ公言と娘でないとする觀察との矛盾を解釋して或る者は妻なりと云ひ又或る者は第一第二の夫人なりと云ひ、或者は買つた女の子を育て上げて歐洲へ賣りに行くのだらうと云ひ、餘程善意に解する者は大家の令嬢英國に行かんとするに際し偶偶歸國せんとする英人ありて之に保護を托す、托されたる人は保護を全からしめん爲め之を娘と稱するのみと言つた。こんな事は何でもない事なんでありますが無聊に苦しみ勝な船中では會話を賑はす材料となるんであります。殊に親と稱する男は其の態度極めて尊大で黄色人種と話しをするのは恥だとも言つたやうな態度でありました。此の態度が或る者には話しをして女の妾である事を悟られぬ爲めの用心とも見えたのであります。食堂に於ける給仕に對する態度など側で見て居て腹の立つ位高慢なものでありました。

ピナコからコロンボに至る間の或る日の夕方、折柄荒れて居た海上に一隻の漁船らしいものが見えました。割合近くを通つて居たので此方からハロ—と呼んだら先方でも何か答へて居るやうであります。我我素人は此の荒海を小さな漁船で渡れる筈はないと考へたので一應は難破船かと思ひました。然し一等運轉手が見張をして居て、先方から何等の信號がない事其他の事情よりして難破船ではなくて季節風を利用して航海する舟らしいと判定したのであります。此の事件の西洋人は、難破船を助けの怪しからぬ、英國到着の上デイリー・テレグラフ紙に報告するなど言つて脅迫的文句を並べるのであります。コロンボからスエズへの途上に於て一夕日本食が晚餐に出た事がありました。此の際にも此の西洋人のみは食べませんでした。日本料理の嫌な西洋人のある事は皆承知の事でありませぬから日本料理を食へなかつたかと言つて誰も腹を立てる譯のものではありませんが、件の男は日本料理の食事が終つてから西洋料

理の給仕を受けても見ただけで食へずに退いてしまつて幾ら勤めても夕飯を取らないこの事でありました。かれてかかる手段で日本船の事務員を手古摺らせ結局旅費を無償にさせたりする西洋人があるを聞いて居たのですから皆之を機會に憤慨したのであります。船と一乗客との關係であるから他の者が憤慨する理由はないのですが其處は故國を去ると雖も國民的自覺が強くなるもので船に對する辱しめの態度はやがて日本の國家的權威に對する侮辱であるやうに感ずるのであります。おまけに皆が憤慨して話しをして居る前に來て一日本人乗客の非行を指摘したものですから二等船客日本人十二名は益立腹し、悉く一致して彼と口交しやう決議しました。若し之に違反して彼と口を利いたりした者は彼同様に絶交すると云ふ事になりました。要するに此の男の傲慢な態度、殊に黄色人種を苦力と心得ても居るやうな其の態度と日本飯の出た際に於けるフテた振舞と、日本船に對する脅迫的態度などに彼が米國人である事及び恐らくは彼が若い女二人を有する事に對する嫉妬の情なども多少加はつて其の翌日から彼の一族三人と日本人十二名は一切口を利かず遊戯も一緒にしなくなりしました。かくする事約十日間船が地中海に入つてから、先方で折れて出て日本飯を食はなかつたのは自分が實際嫌であるからなので別に意味はない事を辯明し、女は二つの家から爲した養女である事なども附け加へて講和を申し出でました。日本人側でも彼の其の後の態度の改善された事、及び樂しがるべき彼等の航海の大半が幾分樂しからざりし事に對し同情を表し和を納れました。但し我等は彼が日本食を食はざりし事を原因として絶交するが如き態度の小なるものにあらず、唯人種的に侮蔑を蒙るるを感じ國家の權威が傷けられると感じた時に憤慨するものなる所以を附け加へた。日本で考へてはクダラヌ事に憤慨したものだと思へられるかも知れませんがそんな人でも日本を離れると特に國民的自覺が強くなる

ものであります。船がマルセイユに到着する前の晩此の絶交された三人の送別を主とし伯林へ行く六人の日本留學生諸君の送別を兼ねてシャンパンを抜いて宴を催した。

六、絶交—其の二

シンガポールから一人のオランダ人が乗船しました。長くジャヴァに居た新聞記者で英語は中上手でありました。私が自分は廢墟を見る事が好きだと云ふと北野丸を見給へい廢墟ではないかなと皮肉を言ふ男でありました。甲板へ寝衣のまま素足で上つて來る所などから見てあまりトーンの高い人とは思へませんでした。馬來人らしい妻君と双子らしい三才位の娘を二人連れて居ました絶交事件はスエズで起つたのであります。船が將にスエズの港に入らんとする夕方でありました。皆甲板からあたりの様子などを見て居る時一行中の一日本人が海中に唾を吐いたのであります。それが恰も西洋婦人の前であつたのであります。婦人は怒つて其の日本人の肩を叩いたのであります。そこで肩を叩かれたる日本人は海中に唾を吐く事を左程罪惡とも心得ず唯不幸にして其が西洋婦人の前であつたこと云ふに過ぎないのに豫期せざる酷い制止に會つたものですから癪を吐いたに違ひありません。再び該婦人の前で唾を吐いたのであります。其處へ恰度例のオランダの新聞記者先生が居合せて人の喧嘩を買つて出たのであります。私も側で聞いて居ました新聞記者先生の言ふには婦人の前で唾を吐くのは無禮極まる。婦人に對し禮を失するものは野蠻人なり、左様な人はステイレーヂ・パセンヂャー(下三等船客)たるべき人であるといふを極めて罵るのであります。かれて、寢衣で素足で甲板上に上つたりする新聞記者夫妻の傍若無人な無作法を快からず思つて居た日本人連中は、自ら無作法を致して居る癖に日本人をステイレーヂ・パセンヂャーと罵るは生意氣千萬、おまけに何も彼に關係なき人の喧嘩を買

つて出るからには此方も一同黙つて居れない、婦人の事は先づ不問に附して置くとして此の生意氣な新聞記者を懲懲せず置くものかと殺氣立つて來ました。中にはなぐつてしまへと言ふやうな硬論も出ましたが結果彼を呼んで詰問しやうと云ふ事になつて午後十時頃船がスエズの運河に入るに成りました。日本人側の言ひ分は大體こうなんであります。第一、一體道徳と云ふものは國を異にするに從つて異なるものである。然らば婦人の前で唾を吐いてはならないと云ふは一體何處の國の道徳ぞや。それは西洋の道徳ではないか。我我と雖も郷に入つては郷に從への諺は百も承知の事である。然し我我は未だ西洋に居ない。我等の乗る船は日章旗飄る日本船ではないか。然るに西洋の道徳のみを我等に押し付けて日本の道徳には一顧の勞をも興へざる汝の言分は獨斷である。郷に入つては郷に從へる日本船に在る以上日本の道徳にも尊敬を拂ふべきに日本船の種種の缺點を指摘し、日本の道徳禮義を無視するは日本を無視し日本人を輕蔑する所以であること云ふのである。之に對し彼は日本でも婦人の前で唾を吐くのは無禮であらう。明日一等に居る日本人婦人に尋ねて見やう。船長の所へ行つて聞いて見やうなどと云ふのでした。之に對し我々は聞きたくば汝一人で行つて聞いて見るもよからう、一體事件は一西洋婦人と一日本男子の間の事であつても手前の知つた事ではないではないか、人の喧嘩を手前が買つて出るから我等も黙し難くかく言ふのであると言ひました。第二に手前は我等をステイレーヂ・パセンヂャーと呼んだか、若し我がステイレーヂ・パセンヂャーであるならば、食堂で喫煙をし、甲板へ寢衣素足で上る貴様は更に下等なデッキパセンヂャーであつて然るべきではないかと我我は申しました。之に對し彼は不知を以て辯解して居ました。第三に公衆の前で日本人をステイレーヂ・パセンヂャーなど

と侮辱するは無禮である。若し汝が唾を吐いた人に注意をする意味で言ふのであるならばよろしく穩かに其人に忠告すべきではないか。それが紳士らしい態度であるではないかと云ふのであります。要するに彼は植民地でスレツカラした狡猾な新聞記者、言を左右にして我等の主張に服さうとはしませんでした、談判的一時間にして和成らず我等は明日より絶交すべき旨を宣言して船室に退きました。二等船客二十四人中十二人は日本人でありました。此の十二人から絶交せらるる事は可なり苦痛なものであります。放國を離れて三十日、外國語で喧嘩をするのは始めてでありました。我々の英語も喧嘩が出来るまでに進歩したんだれと皆で笑ひました。此の新聞記者は結局和睦せないうで別れました。

七、波止場の樂人

神戸を出てから四十日目の六月八日北野丸はマルセイユに着きました。數年間交際してもかくは親密になるまいと思はれる程打解けて、何事にも一致の行動を取つた二等船客の日本人十二人の中六人だけは此處で別れてベルリンへ行くのであります。荷物の取纏めに忙しい六人の友人の様子を見るにつけて別離の淋しさがそぞろに湧くのであります。甲板から見下す岸壁の下には三人の樂手が我等の到着を迎えて音楽を奏して居ました。夫妻と其の娘らしい女とでありました。夫なるはハープを奏で母と娘はヴァイオリンを鳴らしました。娘は緑の上衣を着て居ました。全體の様子が非常に淋しく感ぜられる女でありました。聲み勝な眉に眼を上げて甲板を見る其の顔には生活の苦しみから來ると思はれるやうなたるみがありました。音楽が一切り止んだ時甲板から金を投げ與へると娘は拾つてあるくのでした。そのつつまじやかな動作が一層彼女をイザらしく感ぜしめました私の投げた一枚の銀貨は不幸にも海の中に落ちました。探しあぐんで海中に落ちたと思つて海の水

をばし見入る様は哀れでありました。私は更に一枚を投げ興へましたやがて三人は君ケ代を奏し始めました。甲板に居る者は皆脱帽しました。西洋人も日本人も、何さなく嚴肅な氣が迫つて来るやうに感ずる。共に私の眼からは涙が出ましたフランスの女は華美なもの、流行の魁を爲すものと云ふ豫想が私の心にあつたのでせう。而して其はヴァイオリンを奏でて乞食をする娘のある事を含まない豫想でありました。華美其のものででもあるかのやうに豫想したフランスの女の先づ第一に見る女に此の哀れにも淋しい女を見出した事、而も其の女がいぢらしくも容の意を迎へんとして君ケ代を奏した事、君ケ代と聽者の爲した脱帽から生ずる嚴肅な氣持友人との別離より生ずる淋しさ——之等の事がさなきだに故國を去つてからセントメンタルになつた私の心に感情の渦を引き起して涙を出さしめたのでありませう。

我我はしばらくして上陸しました。港近くの汚い街を散歩して居る少年團らしいのが街の廣場でラッパと太鼓の稽古をして居ました。鬨鳴たるラッパの音が晴れた空に響いて如何にもフランスらしい感じがしました。汚い家から人人が馳せ出て来る。鐵砲が響く、群集がごまめく——これがフランス革命だなんだとラッパの音から嘗て活動寫眞で見た嵐の孤兒の畫面など思ひ浮べて革命の様子を想像して見ました。小供の打つ太鼓はナポレオンのアルプス越の時谷に落ちて死んだ少年鼓手ピエールの話を思ひ出させました。其の夜はマルセイユ名物のかずかずを見て旅館のベットに始めての歐洲の眠を持ちました。

八、ロンドン着

到着早友人の自働車に同乗を許されてロンドン市中を一巡しました。古い建物の多くはゴシック建築でありました。遠くより望めば新興民族の意氣を示すかに聳え立ち、近くより仰げば見上ぐる眼を導いて天國に到らしむるゴシック建築の雨に

曝らされる部分は白く隠れたる所は黒く燦んで居ります。此の全體がセビヤ色を帯びて夕日に映ゆる透落着いた感じがして好いと思ひました。更に之に滴るばかりの緑の樹を配した眺めも亦捨て難い趣があります。

ハイドパークは面白い所でありませう。悪人は地獄に入るべし」と書いた旗を立て、おごそかな十字架を脊にして黒衣白髮の老人が雄辯を振つて居るのはキリスト教の説教でありませう。黒い地に「萬國の労働者よ團結せよ」と白く染め抜いた板の前に赤旗を横に熱辯を振つて居るのは社會主義者の演説でありませう。前者を精神的に救はれんとする人類の運動と見るならば後者は物質的に救はれんとする運動でありませう。精神的に救はれんと観する者は物質的に救はれる事の可能性を信じて得ざる者は我等に與へられたる短き生を許さざる限り享樂せんと馳るでありませう。御覽なさい廣く開けた芝生の上暗く繁つた樹の蔭には男女二人を單位とする小世界が幾百となく成立して居て、折しも萌え盛れる夏草に何かしら甘く柔く香の高いものが温醸されて居るやうでありました。

彼等は他の世界が壊れ落ちやうと、死後の罰が如何にあらうと些の頓着もせぬ顔に長からぬ春の氣に陶酔せんとするが如くでありました。到着早ハイドパークを一巡した私には何だか此の公園が人類の憤みの縮圖でもあるかのやうに思はれました。さりながら去る四十八日の間紺碧の空と暗藍の海とを眺めつつ穏やかな航海を續けて来た私にはちと刺撃が強過ぎると思ひました。匆匆として宿へ歸つて、疲れて居るが興奮して居る身體をベットの上に横へました。ハイドパークの片隅に首を垂れて黙黙と草を食つて居た一群の羊が私の頭に浮びました。そしてあの公園にうごめく群集と此の羊の群とを結んで種種な事を考へつてキリストの言葉など思ひ出しました。(一九二六年七月二十五日稿)

新刊紹介

法制史上より見たる

日本農の生活(律令時代上)

瀧川 政次郎 著

法制史、經濟史等所謂特殊史學が一般に研究され出したのは、西歐諸國に於てもさう古いことではなかつた。況んや凡ゆる意味から、學問的に何と言つても後進國の名に甘んじなければならぬ我が邦に於て、この方面の研究が永く閑却されて居り、漸く多少學者の注意を惹くに至つてからも、尙ほ甚だしく所謂模倣時代若くは翻譯時代の域を脱し得ないのは已むを得ぬことと言はなければなるまい。勿論吾邦に取つて必要なのは日本の經濟史であり、日本の法制史である。著者は一般學者が、この事實を無視し、只管西歐の學說、西歐の史實の紹介のみ事とし、自國の正しき史實を顧みざるの極めて少いのを大いに憤慨して居られる。如何にもそれは遺憾千萬なことではあるが、然しその理由として著者が種種擧げて居られることもさることながら、要するに史學研究の發達上に於て我が邦が占めてゐる地位その儘の現れであつて、矢張り差當り已むを得ぬことと言ふの外ないのではあるまいか。そしてその眞實の研究は寧ろ著者その他の新進の斯學研究者の上に殘されたる今後の仕事ではあるまいか。

兎もあれ、私は永く「我等誌上に於て、我國古代の奴隸制度」或は「王朝時代に於ける農民の生活」等に關する地味で而も眞摯な著者の諸論文に接し大いに教へらるるところあると共に、著者の研究上の態度に對し密に多大の敬意を捧げ、更に願はくばこれらの諸論文が纏められ、上梓されんことを希望して居つた。幸にしてそれらが一單行本

の形で纏められ、最近一般讀書界に提供せられたそれが本書である。

既に出てゐるのはその研究の前半だけで、先づ緒論に於て、律令時代に於ける社會階級(第一章)に關して詳説し、且つ從來歴史家に依つて殆ど閑却されてゐた同時代に於ける農民の經濟單位(第二章)に關する明確なる概念を提議し本論に入つては、これを收入の方面よりの觀察(前編)と支出の方面よりの觀察(後編)とに分けて研究を進めてゐる。この中後者は續いて刊行せらるる筈の下巻に殘され居り、本書に收められてゐるのは、收入の方面より見たる農民の生活(第一章)、融通制度並びに備荒貯蓄制度より見たる農民の生活(第二章)の二に分ち、前者に於ては當時の土地制度(主として班田法)の内容を明かにし、この土地制度が果して農民の生活に如何なる影響を與へたかを詳述するところあり、後者に於ても、先づ制度そのものの内容から説いて、その制度が如何なる程度にまで農民の生活の安定に貢獻したかを明かにしてゐる。

僅かの紙幅でその内容の一斑をすら紹介し得ないのは残念であるが、特に附記して置きたいことは、歴史家の最も陥り易き危險は獨斷に走るに云ふことであるが、本書に於ては該博なる引例と周到なる考證とに依り、努めてこの弊に陥らざるやう注意を專にしてゐることである。殊に未だ所謂かみの時代を脱し得ぬ一般國史學者が、動もするに異い物に蓋をするの怯懦な態度を持してゐる今日、自己解剖のメスを振つて躊躇せぬ著者の勇敢なる態度は特に多きべきところであると思ふ。經濟史社會史、法制史等に特に興味を有する學徒諸君には勿論、我邦自らを知らんことせらるる人人に致して一讀を推奨すると同時に、尙ほその下巻が一日も早く上梓されんことを希望して已まない。(菊版三〇〇頁、定價貳圓五拾錢、東京市神田駿河臺西紅梅町十二同人社書店發行)。K. T. 生

學 內 報

臨時協議員會開催

去月四日午後六時から、市内今橋大阪ホテルに於て、財團法人關西大學臨時協議員會を開催し、關西大學大正十五年度追加豫算の件を議定した。

第二學期授業開始

本學年度第二學期授業を左の通り開始した。
學部各部各學年共 九月十三日より
大學豫科各學年共 同月同 日より
專門部各科各學年共 同月同 日より

專門部補缺入學許可

本學期初頭本學專門部補缺學生を募集し、本月六日に入學學科試験を、十日に同口述試験を施行、その結果左の通り入學を許可した。括弧内の數字は入學志願者の數である。

- 法律學科第一學年 一一五 (一五三)
- 商業學科第一學年 六七 (八四)
- 經濟學科第一學年 六五 (七七)
- 文學科第一學年 三二 (四六)

本學大運動場竣成

その各工程につき屢報道するところあつた千里山に於ける本學大運動場は、去月中旬を以て完く竣成を見、新學期開始と共に愈使用に供せらるることとなつた。

本學學生控所新築

今回本學千里山學舎の學生控所を新設運動場メイン・スタンドの上方の高地に新築することとなり、先月初旬起工、近く竣工の運びに

なつてゐる、同建物は鐵筋コンクリート、三階建にして延坪數百五十坪のものである。

千里山學報創刊四周年 記念茶話會開催

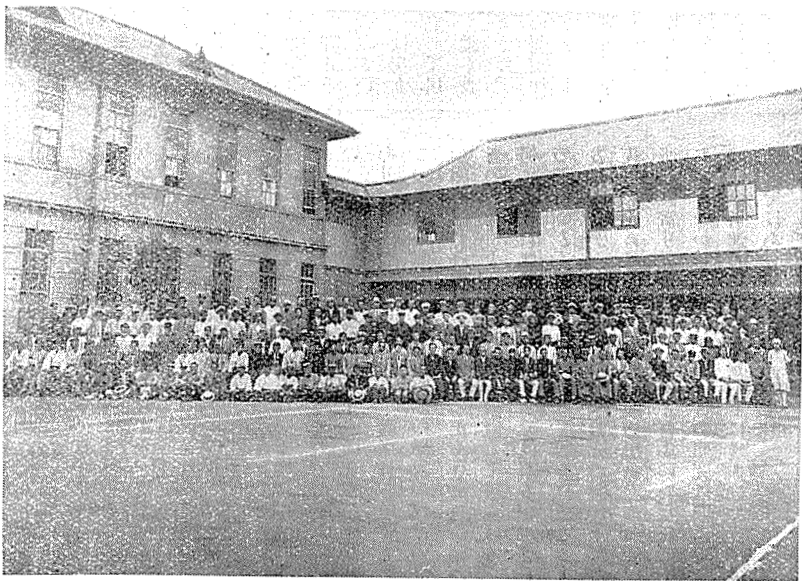
去る六月二十六日午後六時から、市内中之島大阪ビルディング八階に於て、本誌創刊四周年記念茶話會が、特に同誌に關係深き人人に依つて開催せられた。出席者は山岡總理事その他教授講師、學報局員等約二十名、定刻宮島本學專務理事及び辰巳同誌主任の挨拶に次で、各自同誌の發展問題を中心に歡談を交へ九時頃散會した。

歐米諸大學と 學報の交換

從來歐米に於ける諸大學より學報 (University Bulletin) の寄贈にあづかる向きもあり、本學よりも二三、留學生の派遣その他に就いて關係淺からざるものには本誌を寄贈して謝意を表しつつあつたが、今般更に世界に於ける著名なる諸大學に本誌を寄贈することとし、既に前號より發送してゐる。それ等諸大學よりは續續その學報を添えて謝意を表し來りつつあるが、この試みは、國境を超越して、學的に且つ國際親情的に自らなる交驛となり、相互に得るところ尠なからざる事と思はれる。因に寄贈先は左の通りである。

- University of Edinburgh, University of Glasgow, The London School of Econo-

- mics and Political Science, Oxford University, Cambridge University, The University of Leeds, The University of Birmingham, Harvard University, Yale University, The University of Philippines, Stanford University, Boston University,



影 撮 念 記 會 習 講 學 語 期 夏 回 四 第

第三回夏期自由講座

本學主催第三回夏期自由講座は去る七月二十八九の兩日に亘つて午後七時から大阪朝日新聞社講堂に於いて開かれた。題目及び講師は次の通りで第一日には小泉教授が先づ自由講座開催の主旨を述べて開會の辭に代へ第二日には講演に入るに先ち宮島教授が一場の挨拶を述べた。兩日共聴衆多く盛會を極めた。因に本講座の開催に關し種種の便利を與へられた大阪朝日新聞社に對し感謝の意を表する。

第一日

- 一、現代の哲學概念に於ける歴史的發展と其社會的意義 教授 武内省三氏
- 一、戦後の各國關稅問題 講師 野村次夫氏 教授 佐々 穆氏
- 一、判例小評 第二日
- 一、文化思潮の確實性に就て 教授 中村鄧次郎氏
- 一、國家論に於ける立場の混同 講師 井口俊一氏
- 一、企業家の社會經濟的機能に就て 教授 沖中恒幸氏

第四回夏期語學講習會修了式

本誌前號に一部報道して置いた通り、本學第四回夏期語學講習會は七月十二日開講同三十日終了し、都合により七月廿九日修了式を舉

- Columbia University, University of Toronto.

宮島教授英國王立經濟學會 終身會員に選ばる

本學教授宮島綱男氏は去る七月、英國王立經濟學會 (Royal Economic Society) 評議員會に於て、同會の終身會員 (Life Fellow) に選ばれた。

宮島教授の學外講演

本學教授宮島綱男氏は、市内堂島ビルディング内清交社俱樂部の招聘に應じ、去月十日午後一時より「外國經濟學說の誤傳に就て」なる題下に約一時間に亘り講演した。

留學生戸田省三氏通信先

本學留學生戸田省三氏は豫定通り去る六月二十日ロンドンに安着したが、通信は當分矢張り日本大使館氣附が便利であらうと、但し前號掲載の宛先には誤があつたから次の如く訂正する。

c/o The Japanese Embassy,
37, Portman Square, London, W. 1.

人文地理學講演會

今回日本地理研究の爲めに特にフランス政府から派遣せられた同國海軍兵學校教授フランシス・リュエラン氏を聘し、去る九月二日午後七時から大阪朝日新聞社講堂に於いて本學地理學研究會主催、大阪朝日新聞社後援の下に人文地理學講演會が開催せられた。當日リュエラン氏は夫人並に秘書宮本正清氏同伴にて午前十時四十三分大阪驛着、出迎への宮島教授、田川秘書等と共に特に希望に依つて日本

料理の中食を攝り午後は天王寺、大阪城等市内の名所を見物した。大阪ホテルにて夕食の後會場に向ひ小泉教授の紹介にて壇上に立つた。講演はフランス語でなされ秘書宮本氏通譯したが、講演中、風光絶佳なるフランス地中海沿岸のコート・ダジュールの寫眞約五十枚を幻燈で映寫し、二時間餘に亘る講演を一層興味あるものとした。午後九時半多數の聴衆に多大の感銘を與へて散會したが、因にリュエラン氏一行は控室にて少憩の後暫く夜の散策を樂み、大阪ホテルに一泊して翌日有馬の寓居に歸られた。

附屬第二商業學校彙報

第二學期始業式 本學附屬第二商業學校では去る四日午後五時から同校校庭に於いて第二學期始業式を舉行了し、定刻職員生徒一同校庭に整列木下主事の簡單な式辭校歌の合唱があつて閉式した。

第二學期授業開始 始業式のあつた翌翌六日から各學年共授業を開始した。

松本生徒監體操講習會出席 生徒監兼體操科擔任教諭松本直彦氏は本月十二日から十四日まで市内天王寺中學校に於いて催される大阪府教育部主催の體操講習會に出席することになった。

附屬關西甲種商業學校 第二學期授業開始

附屬關西甲種商業學校では本月一日午前八時から第二學期始業式を舉行し、同日から授業を開始した。

校友彙報

校友向井重太郎氏の渡歐

大正十三年度專門部商業學科卒業の校友向井重太郎氏は卒業後貿易商永柳商店に勤務中であつたが今回向ふ三ヶ年の豫定にて同店より歐洲出張を命ぜられ、去る七月二十二日神戸出帆の郵船箱根丸にて渡歐の途に就いた。同氏は先づフランスに向ひ順次英、獨其他諸國の商業狀態を視察して廻るのこころである。尙出發に先ち同氏に卒業年度を同じくする校友數氏の發起にて七月三日夕刻から市内阿波座ゼニヤ食堂に於いて送別會が開かれた。同氏を主賓として六藤、田中、永井、山本、岸本、霜村、森川の諸氏相會し同氏の前途を祝して一夕の歡を盡した。

校友内藤尠夫氏の渡歐

大正十二年專門部經濟學科卒業の内藤尠夫氏は今回かねて捧職中の大原社會問題研究所の命に依り來る九月三十日神戸出帆の郵船北野丸で渡歐することになった。目的は歐洲各國就中大陸諸國に於ける社會問題關係の諸機關特に圖書館の視察で約一ヶ年間の豫定のことである。尙大原社會問題研究所長高野博士も途中まで同行せられる由。

西淀川俱樂部例會

校友會西淀川俱樂部例會は去る六月二十五日午後六時から市内大和田町圓喜亭に於いて開かれた、折柄の小雨をついて集るもの十餘名先づ鮎子多氏の挨拶あり、各自持寄りの案件

二三を討議して宴に移る。席上美妓あり會員の自己紹介や餘興に歡を盡し十二時に垂して散會したが盛んな會合であつた。因に當日の出席者は次の通りであつた。—西家幹事報—

校友會明石支部設立

去る六月廿七日本學辯論部が明石市に於て、講演會を開催したが、同地に於ける本學校友諸氏は、それを機會として該講演會場であつた明石市公會堂に於て本學校友會明石支部の發會式を舉行了し、當日議決した同支部の會則及び現在役員並に會員は左記の通りである

會則

- 第一條 本會ハ關西大學校友會明石支部ト稱ス
- 第二條 本會ハ明石市榎屋町一六〇(寺島方)ニ本部ヲ置ク
- 第三條 本會ハ學術ノ研究並ニ會員相互ノ親睦ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ明石市及明石市附近在住ノ關西法律學校及關西大學卒業生ヲ以テ組織ス
- 第五條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達センガ爲メ左ノ事業ヲナス
 - 一、毎月例會ヲ開クコト
 - 二、毎月會報ヲ發行スルコト
 - 三、春秋二回大會ヲ開クコト
 - 四、時宜ニヨリ講演會ヲ開クコト
- 第六條 本會ニ支部長及幹事若干名ヲ置キ部務ヲ處理スルモノトス。支部長及幹事ノ任期ハ一ヶ年トス
- 第七條 會費ハ一ヶ月貳拾錢トシ毎月之ヲ徵收スルモノトス

第八條 本會事業ノ成績並ニ收支決算ハ之ヲ會報ニ掲グルモノトス

第九條 幹事ハ會員三分ノ一以上ヨリ請求アリタルトキハ遲滞ナク總會ヲ開催スルコトヲ要ス、幹事ニ於テ必要ト認メタルトキ又同ジ

第十條 會員ニシテ本會ニ對スル義務ヲ怠リ又ハ本會ノ體面ヲ汚シタル者ハ除名スルコトアルベシ

第十一條 總會ノ決議ハ會員ノ過半數ノ出席アリ且ツ其ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ以テ決ス

支部役員一支部長、片山元藏、副支部長、尾島登龜雄、庶務部長、松井慶次郎、會計部長、寺島熊市、幹事、香川一男、赤松佐一郎、吉川義治

會員氏名一橋口爲輔、林義雄、西村三郎、尾島登龜雄、大森庄三郎、片山元藏、香川一男、中村清成、江見與平、寺島熊市、赤松佐一郎、坂本七兵衛、杉山多喜也、松井慶次郎、松尾三郎、犬山正次、芳田忠兄、近常秀一、川島政雄、加藤謙次、久保田幸造、天野芳一、長谷川涉、櫻井喜四郎、吉川義治、宮野宗一、木下景家、中内秀次、平賀松男、福井米雄。

東明會創立

校友奥田甚之助、高梨乙松、松永三郎、秋田旭諸氏の發起に依り此度淀川以東餘江川以北の市内在住の校友を中心とする校友會東明會が設立せられ去る七月三日午後六時半から野江町粹香園で第一回懇親會を開催したが會員多數出席頗る盛會であつた。尙現在會員は左の諸氏で入會の申込は北區澤上江町四一七松永三郎氏方にて取扱ふ。

木村梅太、幸田口峰雄、奥田元良、大津正一、橋木利八、安藤勘一、田中岸、飯田清藏、門改金次郎、中村真之助、藤井正雄、高林勝雄、三上健夫、永田規矩夫、奥田甚之助、高梨乙松、松永三郎、秋田旭(順序不同)

校友會愛媛支部發會

愛媛縣在任本學校校友諸氏の間には校友會支部設置の議があつたが、過般愈熾熱し、松山市在住長埜、森脇、加藤等の諸氏の奔走の結果、恰も母校福島學友會文藝部の夏期地方講演會が同市に於て開催された翌八月一日午後一時

校友會愛媛支部發會式記念撮影



から、同縣伊豫郡郡中町彩濱館樓上でその發會式が舉行せられた。定刻校友の會する者十數名、外に母校教授櫻井匡、同講師原田鹿太郎の兩氏も出席、先づ發起人の經過報告があり、續いて會則の議定、役員の選任等があつて懇親會に入つた。懇親會に於ては、加藤幹事の挨拶に依つて開

宴佐藤支部長の就任の挨拶、櫻井教授の挨拶並に母校の近狀に關する詳細なる報告あり、次で一同學生時代の昔に歸つて、大いに驪を共にし、午後七時盛會裡に散會した。因に會則並に會員及び役員の名は左の通りである(長埜幹事報)

關西大學校友會愛媛支部會則

第一條 本會ハ關西大學校友會愛媛支部會ト稱ス

第二條 本會ハ愛媛縣下ニ居住スル校友會員有志者ヲ以テ組織ス

第三條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ計リ併セテ關西大學ノ隆盛ヲ計ルヲ以テ目的トス

第四條 本會事務所ハ役員邸宅中便宜ノ箇所ニ置ク

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
支部長一名、幹事若干名
支部長ハ會員總會ニ於テ推薦シ幹事ハ會員總會ニ於テ選任ス

第六條 支部長ハ本會一切ノ事務ヲ總括ス
幹事ハ支部長ヲ輔佐シ諸般ノ事務ヲ掌ル

第七條 役員ノ任期ハ滿一箇年トス但シ再選ヲ妨グズ

第八條 會員ハ會費トシテ毎年金壹圓ヲ納ムベシ

第九條 會員總會ハ毎年一回之ヲ開ク但シ必要アル場合ニハ臨時總會ヲ開クコトヲ得

第十條 本會則ハ總會ニ於ケル出席者過半數ノ同意ヲ得テ變更スルコトヲ得

會員役員氏名及び事務所

會員一今井卷太郎、今西貞夫、原關太郎、加藤敬之、丹島、長埜友市、村上春藏、越智清太郎、山本芳三郎、佐藤義道、滿田清四郎、森脇秀正、森脇以上八月一日迄ニ申込ノ分)

役員一佐藤義道(支部長)、加藤敬之(幹事)、長埜友市(同)、森脇秀正(同)、今井卷太郎(同)

事務所一松山市豊坂町一丁目蓮福寺加藤敬之内

福岡支部會合

校友末松正行氏が過般小倉區裁判所監督判事に榮轉、赴任したのを機として、校友會福岡支部を中心とする北九州在住の校友有志は去る八月十四日午後六時から小倉市料亭津田倉に同氏を招待して盛大な歡迎宴を張つた。池田重吉氏報

校友動靜

西本楠太郎氏(明二二法) 今般鳥取縣松江區裁判所に轉補された。

田邊明四郎氏(大二法) 今回ベルベツト石鹼會社の秘書兼營業部長に任ぜられた。

淺香新太郎氏(大〇法) 從來堺稅務所屬であつたが今般玉造稅務所に轉動した。

池内覺太郎氏(明四五法) 今回大阪地方裁判所判事に轉任した。

藤田彌太郎氏(天一法) 過般神戸地方裁判所民事部判事に就任した。

寺田梅治郎氏(明三五法) 今般郡役所の廢止により從來兵庫縣津名郡長であつたが近く郷里へ移住する由。

神崎包吉氏(明四二商) 今回大阪手形交換所を辭任した。

角谷榮治郎氏(明三一法) 過般大阪控訴院檢事に轉補された。

中場彌太郎氏(明三二法) 從來吳區裁判所監督判事であつたが今般尾道區裁判所監督判事に轉補された。

小谷常英氏(明三七法) 今般松江區裁判所檢事に轉補された。

末松正行氏(推) 今回小倉區裁判所監督判事に轉補された。

佐久間辰二氏(推) 今回大分地方裁判

所部長判事に補された。
坂口 清氏(明三四法) 過般名古屋地方裁
判所部長判事に轉補された。

大月義平二氏(明三四法) 今般秋田地方裁判
所檢事正に轉補された。

前川美 知氏(大八法) 今般兵庫縣社町稅
務所屬を退職し別項同氏轉居地にて私立稅
務相談所を開設した。

西川留太郎氏(大二四大政) 今般長崎縣地方課
に勤務することになった。

高梨乙 松氏(大九法) 今回事務所を北區
中野町三丁目淀川橋東詰に移轉した。

森川健次氏(大五法) 先般日本銀行を辭
職した。

泉 義三氏(大二四專商) 今般江商株式會社
孟買支店勤務を命ぜられ八月二十六日神戸
出帆タコマ丸にて赴任。宛名は別項移動欄
の通りである。

脇房 易氏(大一二商) 今般萬朝報大阪支
局を辭職し、大阪中外商業新報社に入社し
た。

山口直三郎氏(明二二法) 先般大審院を辭し
東京京橋區三十間堀三丁目一〇に公證役場
を新設した。

白川千代治氏(大一一法) 今回香川縣觀音寺
町の本事務所以外に丸龜市地方に法律事務
所を新設した。

校友住所移動

内田政 一(大三經) 尼崎市旭硝子株式會社尼
崎工場

三輪 一(大三四專商) 豐能郡豐中村新免近江銀
行行友館

田邊明四郎(大二法) 兵庫縣武庫郡六甲村篠原

加藤 正春(大五專商) 下ノ井出五二三
青森縣東津輕郡東平内村
大字外童子共榮土地山林
部事務所内

嵯峨松太郎(大五專經) 兵庫縣川邊郡小田村長洲
字丸田二一

淺香新太郎(大〇法) 大阪府東成區岡之町一一
小森靖氏方

丸尾不二男(大五專法) 三島郡清水水村服部寺井退
吉氏方

栗山基 一(大三法) 富山縣大久保町富山區裁
判所大久保出張所

七野甚之助(大五專法) 岸和田市本町一一八
兵庫縣武庫郡寶塚一寶別
邸

谷口隆佳(大五大法) 神戶市外西灘村上野中原
二〇ノ三

藤田彌太郎(大一一法) 東濠川區十三西之町五四
西成區粉濱町五四八

藤原光治(大〇法) 東京府大森町谷戸二三八
越智(仙助)(大六法)

後藤新治(大四專經) 廣島市天神町六九帝國火
災廣島支店

增田登米男(大〇商) 東區清水谷西之町三五六
岡本義男(大三法)

好田磯二(大四專經) 神戸市東山町二丁目一九
但馬直吉(推) 西區土佐堀船町一四
寺田梅治郎(明三五法) 滋賀縣坂田郡東黒田村大
字長岡一五四〇
妹尾光恭(大四專商) 兵庫縣武庫郡魚崎町横屋
字内田二〇
人見福藏(大一一法) 東京市小石川區林町四三
河内久考(大一一法) 東京府南葛飾郡大島町五
丁目

千里山學報維持費受領報告

(受領順)

金參圓也	推	河村重一氏
金參圓也	推	吉藤浩平氏
金參圓也	明二七法	森田鶴三郎氏
金貳圓也	大一一〇法	藤原光治氏
金貳圓也	大二商	島 昌三氏
金貳圓也	推	頓宮悟一郎氏
金貳圓也	大一一三商	浮田時太郎氏
金貳圓也	明三七法	瀬上弓之助氏
金貳圓也	大一一〇法	淺香新太郎氏
金貳圓也	大一一四專經	古市賢太郎氏
金貳圓也	明二二法	山口直三郎氏
金貳圓也	明三五法	黒田代次郎氏
金貳圓也	明二七法	新免峰次氏
金貳圓也	大四法	木下林三郎氏
金貳圓也	明三一法	大竹房太郎氏
金貳圓也	大九法	西村 信氏
金貳圓也	明三六法	本 多 孝氏
金貳圓也	明三三法	近藤政治氏
金貳圓也	明二八法	諏訪元八氏
金貳圓也	明三〇法	細見重喬氏
金貳圓也	明二八法	三野莞爾氏
金貳圓也	明三七法	藤高豐作氏
金貳圓也	明三三法	佐中米藏氏
金貳圓也	大一一二商	今西文人氏
金貳圓也	明三九法	中村虎治郎氏
金貳圓也	明二九法	松本正寛氏
金貳圓也	大一一四商	上田三治氏
金貳圓也	大一一二法	中永美雄氏
金貳圓也	明三九法	古田吉五郎氏
金貳圓也	協議員	喜多村桂一郎氏
金貳圓也	大九法	沖 鶴 忠氏
金貳圓也	大九法	中川八百八氏
金貳圓也	推	西村孝三氏
金貳圓也	推	田崎良一氏
金貳圓也	推	鞍 貫 宜氏
金參圓也	大三法	忽那文治郎氏
金參圓也	大六法	岸田富藏氏
金參圓也	推	島田繁太郎氏
金參圓也	推	木下信次氏
金貳圓也	明四四商	西田重太郎氏
金貳圓也	大一一法	山根瀧藏氏
金貳圓也	大六法	西木寛一氏
金貳圓也	大一一法	別木静哉氏
金貳圓也	大九法	岡本保誠氏
金貳圓也	明二五法	中井淳一氏
金貳圓也	大一一法	木澤才藏氏
金貳圓也	明四四商	藤本延介氏
金貳圓也	大七法	中村利三氏
金貳圓也	大九法	片岡袈裟治氏
金貳圓也	大三法	橘 芳太郎氏
金貳圓也	大九法	松原武郎氏
金貳圓也	大一一商	中西幸男氏
金貳圓也	大一一三商	小橋正男氏
金貳圓也	大一一三商	龜木茂驥氏
金貳圓也	大三五法	黒田健次郎氏
金貳圓也	大三五法	水島有年氏
金貳圓也	推	但馬直吉氏
金貳圓也	推	吉長正好氏
金貳圓也	明四四法	木村三太郎氏
金貳圓也	大一一一經	栗山基一氏
金貳圓也	大三法	四塚利一氏
金貳圓也	推	金參圓也

エッチウアース教授の 略傳及び學說(その二)完)

ジョン・メーナー・ド・ケーンス

併し、エッチウアースが一九八〇年に、次の如く書いてゐるのを讀む人は、彼の狡猾な含笑を聞く事が出来るであらう。

「性の特権は、幸福獲得、行爲及び思慮の精力的である事等によつて、想像される男性の優越能力の上に、それ等しき重きを持つて置かれてゐる。而して、この論據は、常に、(女よ、汝は弱きものよ、吾胸に注ぐ汝が情熱は、太陽の燦たる光りに注ぐ月光のごやう、果又、強烈しき酒に注がる淡き水のごやうきも) — Woman is the lesser man, and her passions unto mine
Are as moonlight unto sunlight
and as water unto Wine!

と言ふ感情の上に立つてゐる。女子が一般的に言ひて、推定能力の劣れる事は、或る特殊の情緒、或る特種之美、及び織絹等の如き特異なる能力に依つて償はるべきものと推測する。美のかくの如き過重なる觀念に投合して現代婦人は、或種の手段、或種の贅澤物及注目を過分に受けてゐる。

しかし、かの古代武士道に端を發した、各種の情操を抱和してゐる、婦人に對する殷懃さは、他の色色の原素を含んでゐる。それはかの禮節正しいヒュームに依つて「弱者に對する保護」の言はれ、熱情的なルッソーに依つて *philantropos* の説明されてゐる。

實在せる諸説より執られてゐて、そこに、功利主義よりの推理を、現代女性を圍繞する隔壁であるところの無能力及び特権との間に、美はしいの一の一致が見出される。
[Mathematical Psychics p. 78]
エッチウアースは次に、倫理學への數學應用の第二次の實行に進んだ。換言すれば、多分彼が最も執心した學となつたらしい *Belief* への應用、即ち蓋然性の計算法であつた。
一八八三年より一八八四年の間に *Philosophical Magazine Mind* 誌及び *Hermathena* 誌に、蓋然性及び過誤の法則 (*Probability and the Law of Error*) について數度執筆した是等の論文は極めて長い一の連鎖をなしてゐる。その最後に「一般化された過誤の法則」についての今一つの綿密なる論究が統計雜誌 (*Statistical Journal*) に發表されるやうに残されてゐた。

通常蓋然性に關して、エッチウアースの最も重要な著作は、一八八四年の *Wind* 誌上及び *Encyclopaedia Britannica* (一九一一年改版) に掲載された「偶然性の哲學」—— *The Philosophy of Chance* —— に關する論文である。
エッチウアースは、彼が恰も功利主義的倫理學の主張者として、何れか言へば形而上學よりも寧ろ形而下學の方に偏執を持してゐたやうに、*Frequency Theory of Probability* の主張者として、その概念について論理的根柢よりも物理的方面に強い偏執を持ちはじめた。しかし、その双方の問題に於いて、彼の心は反對論に眼醒め、その反對論の重苦しさは時の経過と共に、消え去るよりも寧ろ、彼の心中に漸増して來たのであつた。

こは言へ、彼は何れの問題に於いても、他人の諸論に依つて、是等の重要な推定を動かされる事はなかつた。ただ、その結果としてその哲學的の論據に對しては、漸次懷疑的態度を執つた。その哲學的の論據は實用主義的態度を結體して、それ等の上に具合好く建設されて來たところの實際的應用の數數に對してゐるものであつた。しかしながら、實際にはこれ等の論據は不確實なものであつたかもしれない。斯う言ふ譯で、彼の興味を中心は、蓋然性から統計學の理論へ、功利主義から經濟學の限界説へ漸次遷移して行つたのであつた。

余は、若し *Frequency Theory* が一つの論理的學説として破端を示したる際に、現代の統計學及び、相關關係理論の學説が、果して、この程度にまでなり立ち得るやうについて彼の説を示すやうに、しばしば懲憚した。

彼は常に答へた。フリクエンシー・セオリーの破端は統計學理論應用の普遍性に影響するだらう、しかし統計的論材の大部分は、彼の説に據れば、それにもかかはらず、統計的理論の確實性を證する種種の條件を、それ等が如何なるものであり得べきやを論ぜず、満たすのだ、こ。

余はこのこが眞實であるこを期待する。それは主として統計學に興味を有する人の取る態度としては當然であるから。しかし、それはエッチウアースに於いて、彼の青年時代のより空論的學究を改めるの念及びより一層さうした空論的態度を執るの念も無いと言ふこを暗に證してゐる。

同様のこが彼の經濟學の論文の中に覗はれるのは眞實である。

彼は、他の古典學派の經濟學者の多數の人達と同じく、實用主義的倫理學及び實用主義的心理學と共に、限界説の初期の假定が、果してこの程度にまで成り立ち得るか、或はこの程度に於いて破端を示すかを考察しやうこは考へなかつた。

その假定と言ふのは實用主義的倫理學及び實用主義的心理學を除外して出現し、且つ誠意をもつて肯定されたこころのものであつて、現今に於いては、その創稱者達の中には誰もそれ等を肯定する人がないのである。

ミル、ジエボンズ、一八七〇年代のマーシャル及び一八七〇年の末頃から一八八〇年代の初期のエッチウアース等は實用主義的心理學を信じ、この信念の下に限界説の基礎をきづいた。その後のマーシャル及び、その後のエッチウアース及び幾多の後進は十分にそれを信じてなかつた。がしかし、吾人は尙その實際の根據の鞏固さを十二分に検討せずして、その上層建築を、棟の立派さを、信するものである。

エッチウアースの統計學の業績については、必ずや統計雜誌 (*Statistical Journal*) 誌上に於いて論ぜらるであらうから、余が茲に喋喋するの必要が無い。

一八八五年以後、彼のより一般的な論文、殊に一八八五年の統計雜誌の *Jubilee volume* に發表した *“Methods of Statistics”* の一九一〇年の國際統計協會の會報に掲載された *“Application of the Calculus of probabilities to Statistics”* は英國學生をして *Lexis* により礎かれたる獨逸學派の業績と接觸を保ち、頭初より相關關係理論に立てる英國の統計學者の業績を、證明し、批判し、且つ賞讃しつ

つ行かしたことに關つて大いなる功績があつた。

彼の組織的な著作、特に晩年には、彼の精力は、彼の「一般化された過誤の法則」——Generalised Law of Error——の非常に綿密にして難解なる議論に集中された。

エッチウァースはその論じ方について特種の形式を採つたが、その原因は、一部、彼が他の統計的公式の中にその成績を求めんよりはより一般化された假定の上に彼の成績を求むることが出来るやうに、彼が希望した爲に、その希望が最少限度の假定を必要としたことにあると余は思ふ。

かくの如き方法によりて彼は、實用主義から明かに離れた態度で、かつて在りし彼のその當時の統計學説の論理的根據に關する悪感を取除く事が出来た。

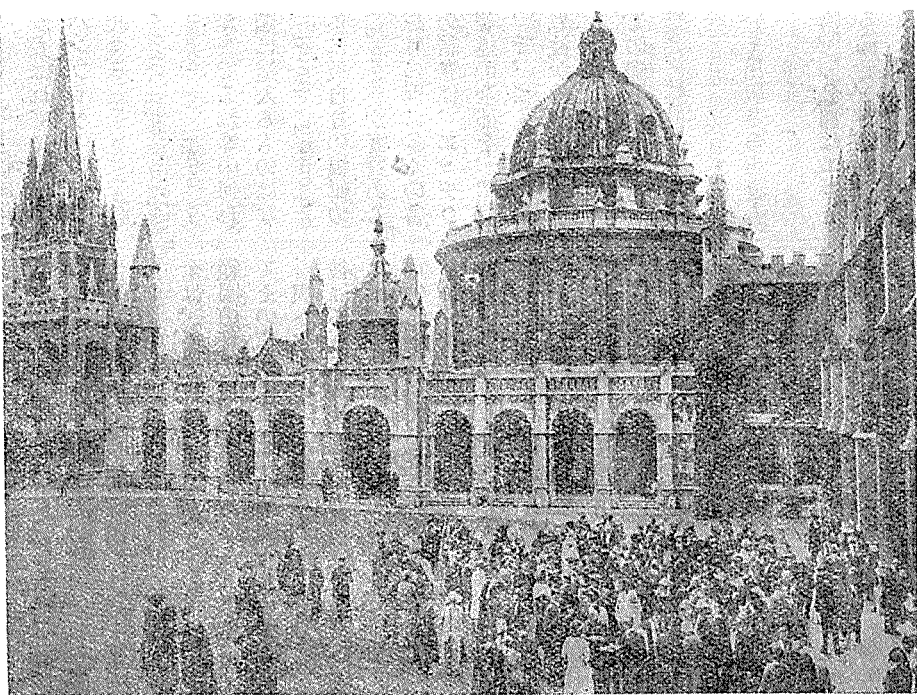
彼の三十八歳の時、即ち一八八三年に蓋然性及過誤の法則に關する最初の論稿が出た時、殆んど同時に第五の項目（余はエッチウァースが一八八三年に、統計雜誌に發表した最初の寄稿「The Method of Ascertaining a change in the value of Gold」(金の價值變動を亂す法)を参照したい。これは一八八七、八八、八九年に British Association に書出された有名な覚え書き、その後諸種の論稿の長い連續を伴つたもので、その中のあるものは彼の Collected Papers vol. 1. に再録されてある)にこりかかつた。それは彼の生涯の主要なる事業、即ち Index Numbers 又は經濟價値の計算への數學的方便の應用でも言ひ得べきものの範圍を完成する爲であつた

是等は Mathematical Psychics の五つの應用——效用若くは倫理的價値の計量への、經濟的

均衡の代數學的若くは圖表的斷定への、信念又は蓋然性の計量への、顯證若くは統計學の計量への、及び經濟價値又は指數の計量への五つであつた——を、それぞれ、その演繹、明細、及び圖解をもつて組成されてゐて、實に彼の生涯に拂る事業であつた。

彼が若し、それ等の取扱について腐心するやうな人であつたならば一九〇〇年より、一九一四年の間に於いて必ずや Mathematical Psychics 三題する書物を五卷の大冊で發行してゐる筈である。然し事實はさうでなかつた

彼は一八七七年及び一八八一年の二箇の論文について、第三番目の Méthode 又は「蓋然性」の效用計量の方法」三題する論文を一八八七年に發表した。それは失敗の作で讀まるべき價値が多からざるものである(この判斷はエッチウァース自身も賛同したものである)この後、マーシヤルが持つてゐた傾向に正反對に、彼は一事項に關する小論文から一篇に纏つた大論文に完成が近よつて行くに隨つて、彼の發表の形式は Monograph から Paper に Paper より



スルーソ・ルーオるせ過を生半後が被殺スーアウダツエ
祭アニセンエるけに題學(照參事記頁六第)

Essay 12, Essay 14 の Article 12 Article から Transaction に沈下して行つた。彼の後半生の四十年間、破彈の一片は、彼の統計學及經濟學雜誌のページを照す明晰なる頭腦を裂き取つてしまつて、それを實に朦朧

言ふやうな大袈裟なことは、余には到底やれない」を語つた。

彼は、それを收穫遞減に基づいてゐる仕事であるを考へたか、若くは、それ等が彼の力の及び兼ねる者か、或は彼が私かに心に定めてゐた限界以外にあるを考へたかであらう。

こんな説明は最早十二分で、オツカムの刺刀(Occum's razor, 此は、論究の一方法であつて、William of Occum が用ひたるにより此の名がある。即ち餘分にして、不必要なる箇所を嚴密に斷除して、正體實跡についてのみ論究することを意味するのである)が、これ以上を許さない。しかし、これを書き出したのには多少の理由があつたのである。

Mathematical Psychics は、一の科學として或は研究して、その初期の約束を満さなかつた。前世紀の七十年代及び八十年代に於いては、それが大いなる惠澤を保有してゐた事を察するに、Mathematical Psychics は合理的ではあり得た。余は信ずる。

若きエッチウァースがそれを選擇するの際に彼は須らく、その時代より以後の物理學者たちが發見した色々な奇異の點と共に、その秘密な諸點を發見する爲に、深く注目すべきであつた。

マーシヤルの數理經濟學(Mathematico-economics—Economic Journal, xxxiv, p. 332)に對しての態度が、漸次變化して來た事を述べた際にも言つた如く、このやうな變化は、エッチウァースには起らなかつた。そののみならず、極めて正反對に現はれたのであつた。

物理學で眼醒ましく活動したところの原子の假設は、心理學では行詰まつたのであつた。

あらうとも庇護激勵する爲に勞を惜まなかつた、そしてアイルランドや、スペインの最も甚だしい困難にも彼の好意を示した。彼の寛容は、すべてのものを抱合するものであり、そして彼は礎きあけられたる聲價に異常の注意を拂つた。その聲價は、若しその中に彼の諷刺的な閃めきがなかつたならば、過當な名聲として考へられたものかも知れないもので、後輩や、未知の人人を鼓舞激勵する自然的の傾向を持つてゐるものであつた。

彼の總ての遍異性、藝術的特異性は、その逆溢口を、彼自身の書くものの上に見出した彼の實際的な良き感性、日日の如才なさは、總て悉く Economic Journal に捧げられた。エッジワースを知れる誰人についても、彼は一個人として強い個性的感銘を與へた。然し彼を知らなかつた人人に取つては、彼を描想する事は甚だ困難なことである。

彼は、親切で、熱情的で、憤み深く、謙遜で人間性に對して鋭敏な率直さを持つた諷刺的な人であつた。彼はしかも、圭角や、複雑さや、高き氣品や氣むづかしさや、非常なる禮義正しさや、人爲的のものに對しては叮嚀なこゝ等を内に深く藏し、外界よりの壓迫に對しては極端に自己を任せず、屈せざる人であつた。

マーシヤルは、彼の血統の錯綜してゐる事、性情の複雑さを頭に置いて、斯う言つてゐた。「フランチスは實に氣持の好い男だ、然し、イシドロには君方注意し給へ」。

彼の身體の健康さ、根氣は素晴らしく良かつた。彼は彼の七十歳以後に於いてすら、登山家であり、Parson's Pleasure では朝の冷水浴をやり、Oxfordshire の牧場では、易易に

して何時も徒歩するのであつた。

彼は常に、事務、讀書、梗正、引照書類を檢索し（それは空しき詮索であつて、そのこゝこによつて彼の其筋に對する尊敬さ、何事でも彼自身の責任をもつて斷行することを嫌ふこゝこが、彼の時間を浪費させた事は非常なものであつた）、彼が好んでした、難解な定理や、長い數學式を記しつけた變な小紙片を髓え（恰もマリア、エッジワースが彼の曾祖父のこゝこをさう言ふ風に書いてゐるが、手紙を認め、彼の崇高な建築を羨ましい煉瓦をもつて（しかし、それも餘りに尠少の漆喰さ、判然とした建築構圖の無い建築を）、礎きあけるこゝこに従事してゐた。

晩年に及び、繼續的な論を口頭ですることは難かしくなつた。それは年の寄るに共に、身體の不休に注意を拂ふことを厭ふ風があり、又、外見も決して好くは見えなかつた。

然し紙上では、彼の八十歳以後も、彼の智的能力は寸毫も消耗しなかつた。そして、恰も彼がそれを欲してゐたかの如く執務しつづ（鎧を着たまま武士が戰場で斃れるやうに）忽焉として逝いた。

エッジワースは遂に妻を娶らなかつた。然しそれは彼の感受性の缺除してゐる爲ではない。彼の氣難かしさ（人生に於ける彼の概念ではなく）は彼から、色色な方面の十分な親しさを割いた。

彼は、他人から見て彼が持ち得べしと思はれるほどの幸福を得る事は出来なかつた。こゝこは言へ、彼の性格は色色な方面から言つて獨身生活に適してゐた。

彼は最少の物質的負擔を望み、如何なる種類にまれ、家庭的責任を負はされる事を嫌つて

た。さうして、彼は私的生活の快樂さ言ふものなしに満足してゐた。大學内の食堂や、圖書館や、クラブに彼以上に長き期間を繼續して住んだ人はいない。言ひ換へれば、如斯附屬的建物の上に總ての喜びを抱いて、全然それに頼つてゐた人があらうか。

彼は殆んき、その所有物を持たなかつた。（極く少數の家具と陶器のみで）。書物すらも誠に少數であつた。つまり彼は手近の公立圖書館の方を便利にしたからであらう。彼自身のノートや文具やスタンプすらも持たなかつた。

余も知つてゐるが、赤い紐とゴムのみが物質的のものでは彼の所有物であつた。彼の服装はしかし極めて端正で彼自身のスタイルで調和良く着飾つてゐた。彼の見えはスペイン風が多く見えた。

廣い前額さ、長い鼻さ、オリブ色さ、小綺麗な手を入れた鬚さ、強い兩手さをもつて、彼の外貌は際立つてあざやかに見えた。然し彼の着物についても、彼の身體についても、彼の何處さなく不快な氣分は少しは察しられた。

彼はオックスフォードでは、オール・ソールスのスパルタ式の部屋に、倫敦では、マウントヴァーノン五番地の下宿で二つのがら空きの部屋に住んでゐた、ハムステッドの崖の上に聳り立つて、メトロポリタンの平原を眺望し得る所で、五十年前から週借りの下宿を彼がこつたこゝこで、常に借り切つてゐた。

アイルランドには彼が夏の數週間を過す爲にキングスタウンのセントジョージクラブを借りてゐた。

食事は、バツタリーや、オール・ソールス

のホールや、アテナウムや、セヴィルや、又はアルブマルで執り書物は、各所の圖書館や、英國博物館や、ダブリンのトリニチ大學や、Royal Statistical Society 圖書館などで讀んだ。

彼は幼年時代に、エッジワースタウンで、樹上高くかかる蒼鷺の巢の中に腰かけて、ホーマーを讀んださ傳えられてゐる。誠にこのこゝこは點頭かれ得べきこゝこで、彼は常に地上の諸語のものに關はり多からず、超然に生活してゐたのであつた。（完）——霜村譯——

Magdalen Hall の發音のこゝこ

フランス語を通じて變化されたこの語の通俗音はモードリン (Maudlin) 即ちその發音は *Modlin* であつてオックスフォード及びケンブリッジの Magdalen College を意味するのである。元來この語原は聖書の傳説中より出たこゝこであつて、キリストの弟子で、ガリラエの西海岸に在るマグダラ (Magdala) のメリーと言ふ婦人から七つの悪魔が出た (ルカ傳七章三七) である名もなき邪惡な同じものと諷解されてゐるが、西歐の聖徒傳説には、信仰を悔改めによつて、聖徒にまでなるこゝこが出来た淫婦として知られてゐる。マグダレナのメリー (Maria Magdalena) 又はマグダラのメリー (Mary Magdalen) 又はマクダラのメリー (Mary Magdalen) 又はマクダラのメリー (Mary Magdalen) 知られてゐるのは彼女の事である。宗教的因由を多く有する前記兩大學に、學舍名としてのこゝこであるのも點頭される事である。而して兩學舍を指して呼ぶ際に、通俗語としてモードリンと發音するこゝこの記憶すべきであると共に、語原的に、且つ一般的に言つてマクダレンと讀みて誤りならざるはファンク・エンド・ワグナル大辭書その他につきても知らるるのである (The New British Dictionary, ファンク・エンド・ワグナル大辭書、及びオックスフォード版新譯聖書參照) (M. S. 生)

學生彙報

野球部朝鮮遠征

本學野球部員一同は岩崎部長引率の下に八月中旬朝鮮に遠征した。大邱俱樂部との手合を最初として各地に轉戦中であるが同部歸阪をまつて戦績を詳報する筈である。

福島文藝部夏期地方講演

福島學友會文藝部では本年も亦夏期休暇を利用して、例年の通り夏期地方講演旅行を左の通り試みた。

第一日 別府市市會議事堂に於て

七月二十八日午後二時、櫻井教授、原田、辰巳兩講師及び部員十數名は、商船紅丸にて大阪を發し、翌二十九日午前十一時別府着、別途陸路汽車で參着した武田講師も旅館で落ち合ひ、午後七時から前記會場に於て第一回講演會を開催したが、折柄の暑さに拘らず聴衆場に滿ち非常の盛會裡に十一時閉會した。尙ほ當會に種種便宜を與えられ且つ助力を添ふした同市當局、同地各新聞社並に大分市在住渡邊校友に深く感謝の意を表する次第である。

出演者 櫻井教授、武田、原田、辰巳各講師、高部、正井、眞鍋、青田、瀬戸、島田、大島、星野、藤本、松井各學生

第二日 松山市元温泉郡役所樓上に於て

翌三十日午前中を所謂地獄廻りに過し、午後一時出帆の紫丸に乗船した一行は、同日薄暮愛媛縣高濱港に下船、森脇、加藤兩校友の出

迎を受けて松山市に行く。その夜は同市に泊して、翌三十一日午後六時半から前記會場に於て第二回目の講演會を開催した。前日に

福島文藝部夏期地方講演記念撮影



劣らぬ盛會で、殊に松山高等學校安河内教授も來られ、終りまで各部員の説くところに耳を傾けて居られた。この機會に終始多大の後援を各まねなかつた海南新報その他同地の諸新聞社及び同地方在住校友諸氏に深謝の意を表する。因に出演者は前記諸教授、講師及び學生の外に、石井海南新報主筆、長埜、森脇兩校友等であつた。

第三日 高松市公會堂に於て

翌八月一日早朝、同地方校友會支部發會式に

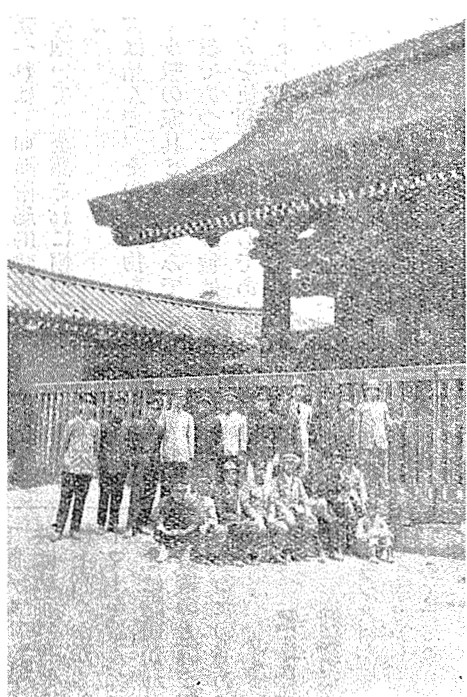
參加するため止つた櫻井教授、原田講師の兩氏を残して、一行は再び高濱港より乗船して夕刻高松市着、直ちに同市公會堂に於ける最後の講演會に出席する。聴衆は前兩回同様約千を數え、午後十一時盛會裡に無事閉會した尙ほ同市諸新聞社、校友諸氏の後援を深謝する。因に出演者は左の通りである。

武田講師、辰巳講師、××校友、西野、嵐、正井、星野、眞鍋、松井、瀬戸、青田、島田、大島、田中、藤本、高部各學生。

翌二日朝一行は今回の行が無事成功裡に終了したことを祝福しつつそれぞれ歸途に就いた因に前記各講演地を通じてプログラムは大體左の通りであつた。

プログラム

人類愛の墓石に直面して
現代教育制度に就て
社會改造の根本要因



福島文藝部夏期地方講演記念撮影

近代思想が資本主義的法律學に及ぼしつつある響影
民衆的大團結を高唱す
法律上より見たる妻の地位

法科 大島守吉
商科 田中久雄
法科 眞鍋靜雄

司會者挨拶
新政治運動と勞農問題
自ら墓穴を掘る者
科學的社會主義の理論
文學と社會生活
社會改造運動に於ける先驅者の功績

政治の經濟的基礎
親、相續法に關する問題二三
社會生活より見たる法律
宗教に於ける崇拜對象

福島辯論部演說會

福島辯論部の有志は去る八月二十九日午後七時から尼崎市圖書館樓上に於いて學生雄辯大會を催ふした。プログラムは左の通りで聴衆堂に溢れ頗る盛會であつた。

- 一、開會之辭
- 一、減小行く民族
- 一、民衆の覺醒を促す
- 一、暗黒より黎明へ
- 一、國民の覺悟
- 一、國民の覺悟
- 一、政界維新に際して
- 一、農民が土に歸る時
- 一、思想善導
- 一、既成政黨打破の可否
- 一、經濟科 眞鍋謙一君
- 一、(法科) 丸山喜三雄君
- 一、(法科) 神戶鶴三君
- 一、(法科) 竹田義夫君
- 一、(商科) 野田生二君
- 一、(經濟科) 杉本信雄君
- 一、(法科) 岸田久馬君
- 一、(法科) 瀧 龜藏君
- 一、(法科) 島田三郎君
- 一、(經濟科) 大熊 隆君
- 一、所謂天下無名の士として(商科) 渡邊正人君

一、普選實施を前にして(經濟科) 松井 廣君
一、閉會之辭 (商科) 田中久雄君

皇陵崇敬會報

皇陵崇敬會にては去る六月六日、青木講師の熱心なる斡旋の結果、京都御所(仙洞、大宮、内裡)及び二條離宮の拜觀をした。

御所に關する詳細は新町講師の論説につまびらかにされてゐる由であるが、會員一同は當日親しく九重の雲居に入り、殿閣の雅致、結構の壯麗、庭園の一木一石にも古往を偲び、實に有益にて感銘深き一日を過し、午後二時二條離宮前で解散した。當日、種種御接待を辱うした澤渡直四郎氏並に青木講師に會員一同より厚く感謝の意を表してゐる。

因に當日出席者は左の通りであつた。

河村講師、樋口講師、大立目講師、横卷大佐、山本順應、山本喜代志、松谷哲藏、野口茂樹、高岡武男、淺見敏郎、吉松須賀根、岩田浩太郎、森井武吉、溝邊文和、奥川武郎、淺見寛次、伊丹、眞田章、齋藤凌。

千里山愛媛縣人會

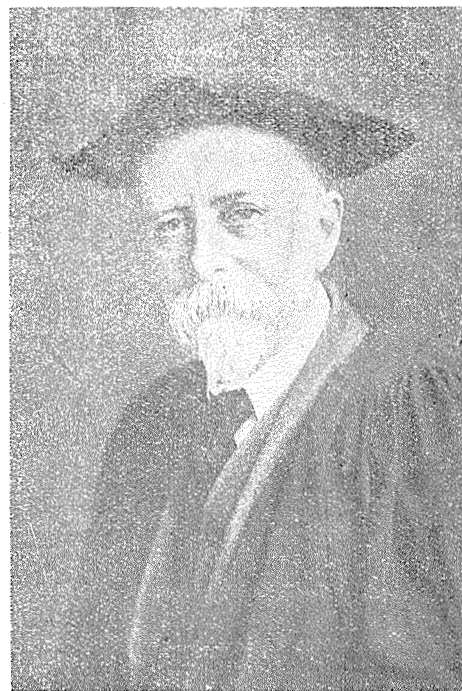
千里山學舎に學ぶ愛媛縣出身の學生が相集つて過般關西大學愛媛縣人會を組織した。此會の特色は學生以外の知名な愛媛縣出身の紳士を顧問として戴き會員が向上の道に進む一の刺激としてゐるに在り。去る七月十四日午後六時から大日本麥酒株式會社重役會で創立總會を開いたが顧問に推薦せられた高橋龍太郎氏、岡本賢康氏、村上丈二氏も出席せられ氣持のよい座敷に打ち寛いで團樂の宴を張つた。何れも胸襟を開いて故山の話などに打ち興じ、就中高橋氏のドイツ留學時代の思出話は一同の興を惹いた。午後十時過ぎ盛會裡

(第二二頁へ續く)

歐米の學界

キヤナン教授引退

ロンドン大學經濟學部教授として令名のあつたキヤナン教授 (Professor Edwin Cannan) は今回一身上の都合で同大學教授の職を退いた。教授が初めてロンドン大學の教職に就いたのは今を去る實に三十一年前であつて其間教授が大學並びに一般經濟學界に對してなした偉大な貢獻は等しく人の認むるところである。教授には次の諸著作があるが就中 Theories of Production and Distribution は過去に於ける教授の主要著作として名著の譽が高い又 Wealth は大正十三年に伊藤眞雄氏が邦譯した。



キヤナン教授の近照

Elementary Political Economy, 1888.
Wealth, 1914.
Theories of Production and Distribution, 1893

Money, Its connexion with rising and falling prices, 1923.

尙引退後の教授は閑地に在つて専心著述に没頭するであらうと期待せられてゐるが、其後同教授はかねて親交のある本學宮島教授へ宛てて次の如き書翰を寄越し引退後の動靜を報告してゐる。

11, Chadlington Road, Oxford.
July 23, 1926.

Dear Professor Miyajima,

Mr. Toda came here on Tuesday bearing your very pretty gifts, which now ornament my room to the great admiration of all visitors. We liked Mr. Toda very well and enjoyed his visit. He seemed a little disappointed to find that I am retiring from London. We are required

and Distribution, but the Economic Outlook is out of print and some of my friends want me to bring that out again write later editions.

Yes, thank you, I got the book and photo. all right, but you will have had a letter from me thanking you before this.

Yours very truly,
EDWIN CANNAN.

キヤナン先生訪問記

在ロンドン 戸田省三

一次の一文は本學留學生戸田省三氏が過般オックスフォードの自邸にキヤナン教授を訪問した時の手記である。教授の風采を傳へる一助もならんここに掲載する。(編者)

前以て宮島教授の紹介狀を封入して、面會日の指定を頼んだ手紙を出して置いた所が、ヨークシャー地方を旅行中であつた先生は旅先から返事を寄せられた。七月十七日にはオックスフォードへ歸るから何時でも訪れて來い、但し午前中の方が都合であるとの事であつた。そこで私は七月二十日に御伺ひ致しませう、なるべく午前中に參上するつもりですが土地不案内ですから或は午後となるかも知れませんが返事を出して置いた。シムスが七月十九日に鉛筆とインキを以て丁寧に地圖を書いて、パスを何處から何處まで乗ればよく、賃金は二片であるまで書き加へた手紙が參りました。面會以前に既に先生の親切に敬服しました。七月二十日の正午、二十分前に、オックスフォードの郊外に近き閑静な場所にある簡素な先生の宅を訪れました。早速通されたのは二階の先生の書齋でありました。書架には背皮の擦り切れた古本がたくさん並んで居て、白髮短髭の老先生がよく調和して見えました。

初めに、日本の話が出て、日本の人口は増加して居るかと聞かれました。年々七十萬位増加して居ますと云つたら始終其の率で増加して居るかと聞返されました。私が左様思ひますが最近産兒制限運動などもありましたから率が少し減つたかも知れませんが云つたら、人口の増加は波形状に進む所以を説かれました。

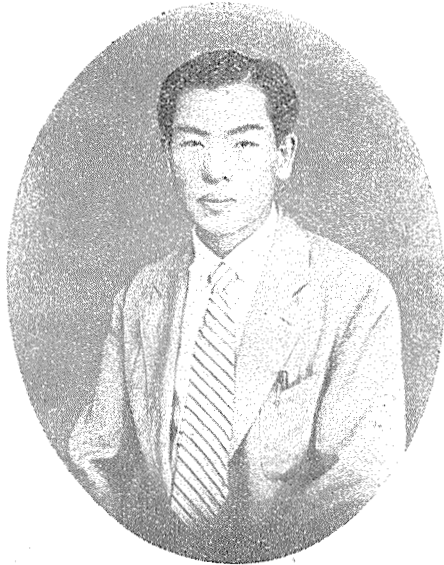
それから、日本語の話が出て、私が日本の學界も相當進歩して居るのだけれど日本語で書いたものは世界の人に讀んで貰へないので困ると申しますと、先生は、日本語は難しくて到底自分達には習得出来ないけれど諸君は割合容易に英語が書けるやうになるのだから英語でも書いてくれ給へと言はれました。そして日本語のタイプライターが出来たこの事だが五百も千もある字を一體どう云ふ工合にして打つのかと思議さうに聞かれました。私が説明しやうとするに自ら立つて自分のタイプライターの所へ行つて色々詳しく尋ねられました。先生のタイプライターはシフティングキーのない舊式のものでこれもキャン先生らしいと思ひました。それから自著の「富」の日本語はよく譯されて居るかなと問ひ、「富」の支那譯も見せて下さいました。「生産及分配理論」の日本語も山下と云ふ人が行つて居る筈だと言はれたので「Elementary Political Economy」の日本語も出て居ますが御手元に送つて来て居ますかと聞いたら、来て居ないがなんものは一八八〇年代に書いたものでもう役に立たぬものなのに云つて笑つて居られました。

私も「Memoirs of Alfred Marshall」中の「ケインズの追想録を譯したと申上げたら、ケインズも貨幣や通貨の事を書くよりはあの種のものを書く方がよほど上手だれと稍皮肉に言つて、彼も「Economic consequences of the peace」を書いてから後あなつてしまつたんだと言はれました。私が、途中の汽車の中で英國の一紳士と話したが

其の時該紳士は「Major Douglas(?)」の本を推稱して居たが先生は如何に御考へですかと言つたら言下にあんなものは無意味だとは言は返して、つまらん著書が随分多く出る、これなども其の一つだと言つて机の上に在る誰かの著書を指されました。

宮島教授からの贈物を呈して、同教授は、始終先生を追慕して居られ書齋には先生の寫眞が飾られてある事などを言つたら、先日宮島教授の書齋で撮つた寫眞を貰つたが其の中に僕の寫眞が見えて居たと申されました。それから宮島教授よりの贈物を解いて、熨斗や水引の説明から松竹梅の目出度い事など話したら、非常に喜んで妻にも見せやうと言つて自分で妻にも見せやうと言つて自分て奥様を連れて上つて來られました。そして水引と熨斗とはマントルピースの上に飾つて置

かうかなと言つて居られました。關西大學でスミス富論出版百五十年記念會を催した事、其の時の學者肖像畫展覽會に先生の寫眞も陳列した事を言つてプログラムを見せて上げました。それから宮島教授の著書の話も出て書架から同著を下して來て日本語のものも讀みたいと言はれました。最後に、私は先生の指導の下に勉強するつもりで参りましたのに、先生が今回引退されたのは甚で遺憾である旨を述べて後任には誰がなられますかと聞いたら僕ももう六十五歳になるからな、六十位が引退した時だよ、然し之から専心仕事を纏める事が出来るのは愉快だ。後任はハーヴァードの Allen Young (?) が来るやうになる筈だつたんだが少し難しい事情があるし、未だ誰とも決定しない。L. Robbins 其他若手の秀才が居るから心配した事はないよ、と言はれた。



近邊謙蔵氏(校友記事参照) 友校内赴赴氏

やがて晝飯の用意が出来たら食つて行けと勧めらるるままにキャン先生夫妻と小生と三人でよもやまの話をしながら楽しく食事を済ました。食事に出た青豆は宅で出来たんだと言つて食事の後に庭園を見せて下さいました。庭の真中はきれいな芝生で其の片隅にはバラの花など美しく咲いて居ました。もう一方の隅は島になつて居て先生の説明による大戦中食料の缺乏に備へる爲め芝生をこれだけ島にしたんだこの事でありました。此の庭と畑の手入は皆自分でするので、僕もなかなか立派な園藝家だと言はれました。歡談を交ゆる事約二時間、午後二時過ぎに先生の

宅を去りました。歸る時には地圖を出して詳しく道筋を説明し、君に書いて送つた地圖は之から寫したんだよと言ひつつ門の處まで送つて来て下さいました。門の處で振り返つて此の家には十六年住んで居るよと言はれました。其の家は極めて簡粗、先生自身の服装なども寫眞で見る通り甚だ粗末、他にも俗な野心の無さうな白髪のお先生は奥様の物語りと庭いぢりに疲れを休めつつ一生の仕事の取纏めにいそいで居られるのでせう(七月二十日夜記す)。

千里山短歌 編輯局選

- △ 五月雨は餘りに悲し此の夕獨り淋しく明笛を吹く 中橋 愁聲
- △ 五月雨にぬれつつ庭の櫻んぼちぎりはみし頃のなつかし 坂本和代志
- △ 折にふれて 街路樹の葉蔭に注ぐ五月雨に音なく暮るる夜の街かな
- △ このころ梅雨の暗さのそれにて晴れぬべくな くひたにくるへる 鉛木たけを
- △ 幸福を君も希ふや春の日にクロロバ摘みつ涙ぐみけり 新宅 生
- △ 事務室に花なぞ活けて一日のつごめのかれ樂しむ夕
- △ かくかくにあきらめあれど一冊の本を讀むにいとまなきかな 藤村まさる
- △ 家 居 藤村まさる
- △ 今宵亦ひこりの部屋の淋しみて野邊に立ち出で月と泣くなり 川上まさや
- △ 山の湯にて われびり山道行けばひぐらしの聲薄くわたり松蔭くらじ
- △ あかつきのゆめなつかしみ朝の湯に思はぬがこも君思ふわれ 吉田凡凡生
- △ 酒飲めば人を恐れぬ嬉しさにさかつきをわれ友とせりけり

(歐米の學界續き)

ハ大學名譽總長エリオット博士の訃

北米合衆國ハーヴァート大學名譽總長、チャールス・ウィリアム・エリオット氏 (Dr. Charles William Eliot) は、去月二十三日享年九十二歳の高齢で、メーン州ノース・イース・ハーバーに於て逝去した。

同博士の経歴及び寫眞は會て本誌に掲げたことがあるが(第九號第二頁参照)、ここに特に附記して置きたいことは、その著「大學經營論」(University Administration)が、本學山岡總理事の需に依り戸田省三氏に依つて譯出されたことがあることである。

(第一九頁より續く)

に散會したが當夜種種の御便宜を與へられた顧問、大日本麥酒株式會社常務取締役高橋龍太郎氏對にし同會では深く感謝してゐる。因に當日の出席者は前記三氏の外松崎學生監始め學生九名であつた。

學生川口司郎君の葬式

前號所報、地方遠征中に死去した千里山ラ式蹴球部員川口司郎君の葬式は、去る七月十五日午後、郷里和歌山縣海草郡紀伊村に於て營まれたが、本學からはア式蹴球部長水谷教授木戸理事室秘書、教練教官横卷大佐、ア式蹴球部員一同、學友會運動部各部代表者等二十餘名が會葬してそれぞれ弔意を表した。

學生杉村眞太郎君の訃

經濟學部商業學科第二學年學生杉村眞太郎君は豫て病氣靜養中のところ、去月十六日遂に死去した。ここに謹んで弔意を表する。

校友諸氏に告ぐ

近日中に着手することに相成居候大正十五年度本學校友會會員名簿作成の都合有之候につき各位の現住所勤務先等に御變動有之候はば成るべく早く左記宛御一報相煩し度此段御願申上候

大正十五年九月

大阪市上福島關西大學内

關西大學校友會

The Kansai University Bulletin

Published Monthly By

The Kansai University Press

No. 42

September, 1926

LEADING FEATURES OF CONTENTS

- Historical Development of the Concept of Philosophy (Begriff der Philosophie) Prof. S. Takeuchi.
- "On my way to England".....Mr. S. Toda.
- Life and works of Prof. F. Y. Edgeworth (1845-1926).....J. M. Keynes.
- University News—Completion of the University Stadium—Summer courses in Foreign Languages—University Extension course—Mr. Ruellan's Lecture on Côte d'Azur.
- News from Abroad—Retirement of Prof. Cannan from London—Prof. Cannan and Mr. Toda—Death of Dr. C. W. Eliot.
- Alumni News.
- Students' Activities.
- Miscellanea—Of Magdalen—Encaenia.

學生諸君に告ぐ

千里山學報投稿に就て

▼學友會各部の記事、各種研究會、親睦會、縣人會その他學生諸會合の記事、論文、文藝作品等本誌に掲載希望の原稿は、總て千里山學舍圖書閱覽室内及び福島學舍學生入口左側に設置してある千里山學報投稿函に投入して下さい。但し寫眞その他投入不能の材料は事務所又は學報局へ直接提出して下さい。▼每號締切は前月二十五日限りとし、その以後の分は次號に廻します。

大正十五年九月

關西大學學報局

大正十五年九月十三日印刷
大正十五年九月十五日發行

不許複製

編輯兼發行人 辰巳經世
 印刷者 飯田彌之助
 印刷所 會社三有社
 發行所 關西大學學報局
 大阪府此花區上福島北二丁目

福島學舍 關西大學
 大阪府此花區上福島
 電話 土佐堀一〇四九
 電話 吹田一三三

千里山學舍 關西大學
 大阪府外千里山
 電話 吹田一三三

關西大學教授 宮島綱男先生著

經濟學原理

(卷上)

菊紙約三總
數約百十
クロ
イブ刷肖
拾參圓五像
八拾五拾數
錢錢葉

下卷近々發行

著者が其透徹せる推理力と豊富なる語學力とを以て研讀潜思幾年の後遂に成つたもの即ち本書である。堂堂一般經濟の原理を論じて照合するところ古今東西の史實、學說に亘り而かも之が嚴精なる批判檢討を通して導き出だせる結論を更に一步現代の經濟事實に近附けたる點に於いて學界稀に見るの好著である。行文平明にして正確、敘述亦繁簡其宜しきを得て經濟學を正しく理解し現時行はるる諸種の學說に對して相當の批判力を得る爲めには先づ第一に讀まるべき書物である。加ふるに各節末には詳細なる參考書目を掲げて讀者將來の研究に便し書中引用するところの學說に關係深き學者の肖像を十數葉の鮮麗なコロタイプ版として挿み裏面に其傳記を附して、學說と時代の交渉並びに學說夫れ自身の印象を一層深からしめんと努めてゐる蓋し經濟學史としても一の纏つた好參考書である。尙ほ本版には書中引用せる學者のインデックスを付し且つ第一、第二に洩れたる又は其後公刊せられたる參考書の目録を増補した。敢へて大方に獎む。

東京市神田區錦町一丁目二番地
發行所 瞭文堂
振替東京一〇三六一番・電話五五五五番一
大阪市西區阿波通四丁目
大阪發行所 大坂株式會社 大寶文館
振替大阪三〇四三番・電話三三三三番一

關西大學 關西甲種商業 關西第二商業 指定洋服商

大阪市上本町六丁目

長谷屋號

電話南四五二番
振替大阪五五三八番

●今宮支店 ●釣鐘町支店

關西大學 關西甲種商業 關西第二商業 指定

明文堂 野島書店

大阪市此花區上福島北三丁目
電話 土佐堀 一二八六番
振替 大阪 三九九九一番

本學校友 野島藤次郎

文房具、制帽
雜貨、食料品

關西大學給品部

千里山學舍學生控所
福島學舍學生控所 內

關西大學 關西甲種商業 指定

山本靴店

大阪市北區上福島北一丁目
(但淨正橋筋大和田銀行前)

岩崎卯一著

四六判・總布製
本文六四四頁

(肖像コロタイプ刷敷葉
書翰寫真凸版刷挿入)

社會學の人と文獻

社會學は、苟も現代文化諸科學の原野に足を踏み入るゝ者の、必ず一度は通過せねばならぬ一大未開墾地である。それは處女林の如き魅力を以て我々を誘ふと同時に、分け入るに従ひ彌々底知れぬ深みと迷ひに導くやうな不安を懷かせる。かうした茫漠たる學問の世界に旅立ち、道遠き真理への巡禮をつゞけつゝ、或は米國の碩學ギディングス門下に學び、或は英佛獨埃伊諸國の優れた社會學者の書齋を歴訪して、思索と生活に闘ふ勇士の風豊や、又その家庭の人としての溫容に對し、一種共通な思慕の情熱を禁じ得なかつた著者が、その歡喜と崇敬の心を記念せんが爲めに書き綴られたものが即ち本書である。とりわけ著者は、思想學說の背後に脈動する學者の心情に深き共鳴を感じて、「學」よりも寧ろ「人」を第一の觀點とし、その流麗精緻なる筆に托して、さながら生けるが如く歐米諸學派の狀勢や學校及び自宅に於ける學者生活を描寫紹介せられて居るが、更に本書全卷に充溢する東西の學者無慮七百の人名並にその數多き文獻をば、一々卷末の索引欄に異常の周到さを以て總括整序せられた。されば本書は實に社會學研究者にとつて最も便利なる參考書であるばかりでなく、特殊の風韻と情趣に満ちた親しみある學術書として廣く學者の好侶伴たるであらう。

定價

金參圓貳拾錢

送料

書留貳拾七錢

内容

- 第一編 ギディングス先生の人と學について (米國社會學界におけるギディングスの地位と勢力)
 - 第二編 パリにルネ・ウォルムス先生を訪ふ (佛國社會學界における反デュルケム學派)
 - 第三編 ロンドン大學にホップハウス先生を訪ふ (英國社會學界におけるホップハウスの地位と勢力)
 - 第四編 ウィーン大學で逢ふた社會學者達の印象 (獨埃社會學界の近視と遠望)
 - 第五編 パレト先生とコセンチニ教授との片影 (伊太利社會學徒の群れとその文獻)
- 社會學者人名索引表 引用文獻索引表

三三三三} 谷四話電
六九四五}
八一—三七東京替振

院書江刀

下坂中段九京東
内グンデルピ山中

勝田貞次著

菊判五百五十餘頁
總布上製函入

定價金 五圓

送料二十七錢

銀行の發展策と信用調査方法

最新刊

著者は曩に米國金融界の組織制度を視察し、歸來大阪野村銀行調査課長として、我邦金融界の缺點を察するところを痛感するに共に、一書を公にして識者の猛省を促がさんとしたもの即ち本書である。本書は之れを三編に分ち、第一編は我邦銀行經營上改善を要する點を論じて其發展を策し、第二編に於て金融の原理を説き、第三編に至つて商業金融發達に對して缺くべからざる信用調査の方法を攻究してゐる。今や金融制度改善の聲漸く高からんとする時、敢て金融業者は固より金融制度研究家の一讀を俟つ。

發兌元

大阪市北區會根崎
上三丁目八番地

振替大阪三一九七二番
電話北一六五三番

大 同 書 院